方向七

原田憲雄

南冠

—奥平小太郎雑記—

Ⅰ はじめに　1

Ⅱ 奥平小太郎略年譜　9

Ⅲ 南冠集訳注　26

序 26　例言 31

詩　在獄咏雪用駱賓王咏蟬之韻 32　無題 35　其二 39　其三 40　其四 44　其五 47　其六 49　土窟歌 51　無題 58　其二 61　其三 64　其四 66　其五 68　其六 69　其七 71　十二月十四日夕感赤穂遺臣事因賦 74　新秋夜雨 78　秋夕書事 79　其二 81　秋懐 82　対月 84　春日送人 84　雑懐 86

文　読離騒 89　伍子胥論 90　跋凍川碑後 94　富国強兵論 97　附録　奥平広胖伝（三島毅）102

跋 107　奥付 109

Ⅲ おわりに　110

正誤表　120

*

1977年・3月20日

方向社

京都市上京区下長者町通

千本西入　妙徳寺内

南冠

―奥平小太郎雑記―

目次

一　はじめに
二、小伝
三　南冠集訳注
四、おわりに

一

「南冠」ということばは『春秋左氏伝』成公九年に見える次の記事にもとづく。

晉の景公が兵器庫を査閲したとき、鍾儀を見て問うた。
「南国の冠をつけたあの囚人は誰かね」
係の役人がこたえた。
「鄭が献じた楚の捕虜でございます」
公は　縄目を解かせ、いたわった。鍾儀は最敬礼した。素姓を問うと、こたえる。

「楽官でございます」
公がとう。
「音楽はうまいのだね」
こたえる。
「亡父の職をついだ、というだけのことでございます」
琴を与えると、楚の音楽を奏した。公。
「楚の君はどんな方かな」
こたえる。
「低い身分のわたくしの存ずることではございません」
強いて問うた。こたえる。
「世つぎの君だったとき、おそばの者がお導きし、朝には嬰斉、夕には側のもとに参ぜられました。その他のことは存じません」
公は大夫の范文子にこのことを語った。范文子。
「楚の囚人は君子です。かれが　捕虜になったとき既に楚の鄢県の首長になっていたのに、家職を申したのはその出身に背かなかったことになります。主君についてその世つぎ時代のことを申したのは客観的であろうとしたからでしょう。楚の二人の大夫を名でよび「令尹子重」「司馬子反」と敬称つきで申さなかったのは　晋の君なるあなたさまに敬意を表すためです。出身に背かぬのは仁　故国の文化を忘れないのは信、客観的であろうとするのは忠

他国の君に敬意をおこたらないのは敵です。仁によって事に接し　信によってこれを守り、忠によってこれを助成し、敏によってこれを行えば、いかなる大事もかならずなしとげるでしょう。かれを屈して晋と楚の和平を進めさせなされてはいかがです」

公はこれに従い、鍾儀を楚にかえしてやった。

この故事によって「南冠」を「囚人」の意味でつかった詩が、七世紀　唐の高宗から則天武后にいたる時代の詩人駱賓王にある。「在獄詠蟬」（獄に在りて蟬を詠ず）である。長い序文がついているがそれを省いて詩だけ掲げる。

西陸蟬声唱　　秋の野に蟬の声して
南冠客思侵　　とらはれの思ひに沁みぬ
那堪玄鬢影　　たふべしや　黒髪の翁
来対白頭吟　　白頭の吟に　対ふに
露重飛難進　　露おもく　飛べどなづみて
風多響易沈　　風さはに　響　しづめり
無人信高潔　　けがれなきを知る人あらず
誰為表予心　　たれか　わが心あかさん

高宗の末年　長安の主簿に昇進してまもなく下獄したときの作といわれる。下獄は収賄のためとも　政策批判が当路者の怒りに触れたのだともいい　あきらかでない。出獄ののち臨海県丞に遷され、その職を捨て、徐敬業が則天武后に対して反乱したとき、その檄文を書いた。反乱が失敗し、徐敬業はとらえられたが、かれは行方をくらまし　僧になったとの伝えもある。

本稿に「南冠」と題するのは、しかし　『左伝』の故事を論じるためでも駱賓王を語るためでもない。「これから語ろうとする奥平小太郎に「在獄咏雪用駱賓王咏蟬之韻」（獄に在りて雪を詠ず　駱賓王詠蟬の韻を用う」という詩があり　かれの詩文集の名が「南冠集」だからである。

南冠形影座　とらはれの　身も影も　やせ
朔吹雪威侵　北風と　雪　しみとほる
携手共誰語　手をとりて　たれと語らむ
檐頭空獨吟　かうべあげ　むなしく　吟ず
雲垂天黯黯　雲たれて　天くらく
人定夜沈沈　人しづまりて　夜ぞふかき
將彼玲瓏影　うるはしき　かのひかりもて
照來高潔心　照らせかし　潔きこころを

一九七二年十一月二十日、古本屋の埃をかぶった零本の山の中から薄い和本を拾いあげたら、

まず目を射たのがこの詩だった。作者は未知の人である。帰って一気に読了した。

『南冠集』は、たて二十六よこ十五センチメートル。題箋には

南冠集　附奥平廣胖傳

と記す。目録はない。松平信正・三島毅・谷鉄臣　作者の序各一葉　柴田忠英の例言一葉、本文は詩二十三首と文四篇あわせて十葉。三島毅の「奥平広胖伝」五葉を付録し　その後に、小野長愛・伊藤和の跋各一葉をそえる。すべて二十三葉。

序跋を読んでわかったことは、奥平小太郎が丹波国亀山の藩士でいわゆる安政の大獄に囚われた人であり、『南冠集』はその獄中作を中心とする遺稿であることである。手もとの百科辞典　文学辞典のたぐいにはかれの名も集の題も見えなかった。わたしが知らないだけでなく　世もすたかれを忘れているらしい、と思った。

たちまち五年たった。その間に　わずかながら　かれに関する文献に出会い知識を増した。亀山すなわちいまの京都府亀岡市にも二度ゆき、二度目のことし一九七六年七月二十二日、西堅田二十七番地の曹洞宗宗堅寺にその墓を探しえた。「遜斎墓」と刻んだ墓石に水をそそぐわたしに微かな感慨があった。

幕末の志士のひとり、と奥平小太郎を称してよいだろう。だが、志は行動において頓挫し、身は幽閉され、夭折した。明治は、たぶんかれの「志」が実現した時代であろう。死なずにその代まで生きたとして、かれは「よし」としたろうか。どうもそうは思えない。かれが志したことに百年後のわたしはかならずしも同感せぬ。しかし詩と文は胸をうつ。

さきごろ多くの大学を突きぬけた嵐があった。教員は学生たちから問いつめられた。問うた学生は去り、大学も社会も嵐を忘れたように見える。問われたひとりのわたしは、あいも変らぬあやふやな日々を送っているが、あの学生たちの問いと それを投げかけたかれらの顔が、ときどきよみがえる。『南冠集』を読むと、かれらはいま 何処で、どうしているだろうか、と思う。この心情は、奥平小太郎ともかれらとも、たぶん かかわるまい。強いていえば『南冠集』に跋文を与えた湖山小野長愈の老情に近いものかもしれぬ。けれどもわたしは湖山のような詩人ではない。では、なぜ、奥平小太郎の『南冠集』について記そうとするのか。

わたしたちの知らない、あるいは忘れてしまったところにも、多くの人は生き、やがて死んだ。生命はかけがえなくても、ひとつびとつを採りあげて他の人々の心にちりばめることはむつかしい。行動と結果の明確な英雄の生涯は史家文人がいくたびもその像を描き大衆も讃仰するであろうが 行動にあらわれず結果を把捉しにくい人の志などは描きようもなく大衆の興味をひくまい。

このところ歴史ブームとやらで、ことに幕末に関する史的記述の出版がひきもきらぬが、管見の及ぶ限りでは、ほとんどそこに奥平小太郎の名は見えず たまたまあらわれても誤りがある。かれが人々の関心をよびおこしにくい存在であるからに違いない。

身近かにいた人たちは かれをあわれみ遺稿を編んだ。『南冠集』がそれである。かれを生んだ地の郷土史は さすがに、かれの名と行跡と遺稿の題を顕彰する。ただ、その集から一首の詩も一篇の文も引かぬ。

甚だしいかな 文詩の世に益なきや。

小太郎は「離騒を読む」文にいった。詩文は心情の軌跡だ。あるいは心情の軌跡を素材として組成した一箇の別世界だ。実際的行動と結果を重んずる人達がこれを捨てたとしてもやむをえぬ。わたしがかれの詩文の前でたちどまったのは、いわゆる現実社会の価値観からすれば零であり負である方向にしばしば傾く心情に、かれの声が、ひびいたからだろうか。

今や、世と文と、また遠きこと甚だし。

おなじ文中にかれはいった。心情を伝えるべき詩文も社会と疎隔してしまう事実を　少年のかれは、すでに知っていた。日本語としての生命を終えた漢文で書かれたかれの詩文は、いまの日本の社会にほとんど無縁であろう。だとすれば　それを今さらに紹介しようとするわたしのわざも甚だ無益であることは明らかだ。けれども、世の価値観が零とし負とする方向にも存在の意義をさぐろうとする人はおり　それらの人のなかに、この忘れられた夭折の詩人の作品を顧みる労をいとわぬ方があるとすれば　たとえ少数ではあろうとも、その方々のために知ったかぎりの興平小太郎の生涯を記し　『南冠集』の訳注を提供しておくことも、むだではあるまい。

『南冠集』以外にわたしの接した資料でかれの名の見えるものは次の通り。排列はわたしの接した順による。「　」内は本稿で用いる簡称。

大日本人名辞書　同刊行会・明治十九年初版・昭和二年増訂十一版。「人名辞書」

亀岡市史　同市史編纂委員会　昭和三十五年　四十年刊。「市史」

京都府南桑田郡誌　京都府教育会南桑田郡部会・大正十三年刊・昭和四十七年影印。〔郡誌〕
幕末の志士　高木俊輔・昭和五十一年刊。
増訂丹波史年表　松井拳堂　昭和三十五年刊。〔丹波史〕
安政紀事　内藤耻叟・明治二十一年刊・昭和四十三年『幕末維新史料叢書』所収。
日本人名辞典　芳賀矢一　大正三年刊　昭和四十七年復刻。
梁川星巌全集　同刊行会　昭和三十三年刊。

このほか　幕末　明治維新史や　小太郎と交渉のあった人たちの詩文集・伝記のたぐいを、見うるかぎりは見た。その時代や気風などを知るために大いに役立ったが、ここに列挙することは避け、必要なものだけその都度かかげることにする。

奥平小太郎の生涯については、その終末の数年のことがおぼろげにわかるにすぎない。だが、日本近世の激動期に生きた人だから、十九世紀中期、天保から万延にかけての年どしのことに全く触れずにすますわけにもいかない。

本稿の二の「小伝」は『読史備要』（東京大学史料編纂所　昭和四十一年刊）『日本史年表』（歴史学研究会・一九六六年刊）などから時代の動きを察知しうると考えられる項目を編年摘録し、他の資料からえた小太郎に関する記事を織りこみ　略年譜方式で、その生涯を彷彿させようとする試みである。

なお『大日本人名辞書』の「奥平小太郎」の項には（報效志士人名録）と出拠を示す。これは『国事殉掌・報效志士人名録』（史談会　明治四十二年　四十四年刊）のことと察するが、もとの本を見ることはできなかった。転載にあたって、あるいは省略や誤記があるかもしれぬが、小太郎のいわゆる志士としての行動を記す点で、以後に見たどの資料よりもくわしい。

本稿の三は『南冠集』全部の訳注である。

『南冠集』の、本文　序跋　附録、ともに漢文で　序跋は楷書体活字　本文は明朝体活字を使用する。

本稿では、奥平小太郎の詩文以外は原文を省略し、誤りと推察できる文字は（　）内で訂しておいた。原文の漢字は原本活字体に従う。訳注で、漢字を当用漢字とし　仮名づかいに文語には歴史仮名づかい口語には新仮名づかいを使用するのは、今の俗に従うのである。

二

奥平氏は、代々　丹波国亀山藩の家臣である。藩主の松平氏と同じく徳川氏の親族から出た。系譜を略示すればつぎの通り。

信光
- 親忠－□□□□－家康－□□□□－□－□－□－□－□－□－□－家斉－家慶－家定－家茂
- 興嗣－□□□□－家信－□□□□－信岑－信直－信道－信彰－信志－信豪－信義－信正
- 元芳
  - 元心
    - 忠景－忠定
      - 好景
      - 康定－広永－広方（興平）－広武－広知－広問
        - 広胖
          - 広淵
          - 広厚
        - 魚人－知素
          - 穆（小太郎）
          - 知善

信光は新田氏である。親忠の後の家康から徳川の将軍家、興嗣の後を形原松平、元芳の子の忠景から後を深溝松平というそうである。

深溝松平の広永は、形原松平の下総佐倉の城主家信に招かれ、客分の家老となった。広永の子の広方は臣の礼をとり、主君と同氏であることを遠慮し「興平」と改めた。広方の子の広武は、寛延二年（一七四九）主君松平信岑の移封に従い丹波亀山にうつり住んだ。信岑以後、藩主は江戸在住が多く、藩政はおおむね城代家老にゆだねられた。

興平氏は、広知（一七二〇－一七八四）、広問（一七五二－一七八八）、広胖（一七八四－一八三七）いずれも重役にのぼったが、ことに広胖は藩政史上もっとも際出した城代家老として知られる。

魚人（一七七三－一八五〇）は広胖の庶兄と察せられる。通称甚兵衛、号翁山。藩儒で、書画をよくした。小太郎の祖父である。

知素（？―一八六〇）は、通称老之助、号枕山。漢儒。小太郎の父である。

小太郎、名は穆　字は士雍。小太郎はその小字としていい通称としいう。「名」は詩文を著すとき本名として記し　「小字」は幼名　「通称」は実質的な本名である。江戸時代の士人は一人でさまざまの名を背負い、その風習は士人以外の教養人にも及び、ことに幕末にはしばしば改名した。本稿で「小太郎」を用いるのは『南冠集』の奥付に従うのである。「遜斎」「古海」「蔵六山人」の号がある。遜斎はたぶん『書経』説命下の

惟れ学ぶには志を遜にし、時に敏なるに務めば　厥の修すなはち来らん。

に因むのであろう。遜とは謙抑の義、時敏とは時として敏ならざるなしの義である。亀岡盆地はかつて湖底だったと伝えられる。古海はこれを含意するのであろうか。蔵六とは首尾と四肢の六つをその甲羅の中に蔵するということで亀をさす。蔵六山人とは「亀山の人」ということである。

『雑阿含経』巻四十三にいう。

時に河中の草あり。亀ありて中に於て住止す。時に野干あり、飢ゑ行きて食を覓む。遥かに亀虫を見　疾かに来り捉取す。亀虫見来りて、すなはち六を蔵す。野干、守り伺ひ　頭足を出ださむことを冀ひ　これを取り食はむと欲す。久しく亀虫を守れども　永く頭を出さず。亦た足を出さず。野干　飢乏顧恚して去る。

小太郎が仏経を読んだかどうかはわからぬが　逮捕究問に耐えた獄中の稿の序に用いるところから察すると　この譬喩は知っていたらしく感ぜられる。

天保五年甲午（一八三四）　小太郎　一歳。八月十五日に生れた。これは陰暦である。陽暦なら九月十七日にあたる。一歳というのは数え年である。この小伝にいう年齢はすべて数え年を、月日は陰暦を用いる。『部誌』は

小太郎は同藩の士堺和氏より入り嗣ぐといふ。

という。この事情をくわしく知りたいが、わからない。ただ『武鑑』の松平豊前守信篤の「用人」の項に「堺和甚五左衛門」の名が見え、それは嘉永七年（一八五四）元治元年（一八六四）慶応二年（一八六六）だが、万延元年（一八六〇）には「堺和志五左衛門」なる名が同じ項に見える。「堺和志五左衛門」は「堺和甚五左衛門」の誤りではないだろうか。堺和甚五左衛門は小太郎の実父あるいはそれに近い人であろうか。松平信篤はさきに掲げた系図の信義と同じ人である。

この年、天皇は仁孝、将軍は徳川家斉。中国では清の宣宗の道光十四年で、アヘン密輸のイギリス船を駆逐している。

『南冠集』に名の見える人で、星巌梁川孟緝は四十六歳　秋、江戸に玉池吟社を開く。拙堂斎藤正謙は三十八歳　伊勢津藩儒員。弘庵藤森大雅は三十六歳、常陸土浦藩客儒。佩弦斎青山延光は二十八歳、常陸水戸藩士。湖山小野長愨は二十一歳　このとき、氏は横山　名は巻で　江戸に出て星巌の門に学んでいた。太湖谷鉄臣は十三歳で彦根藩士の子。鴨涯頼鴨は十歳　山陽の子の三樹三郎である。

天保六年乙未（一八三五）　小太郎　二歳。

十二月、井伊直亮　大老となる。

天保七年丙申（一八三六）　小太郎　三歳。
五月　水戸藩主徳川斉昭　砲台を築く。
この年　諸国飢饉、米価騰貴。
天保八年丁酉（一八三七）　小太郎、四歳。某月某日、従祖父広胖死ぬ。年五十四。追譴せられ　その子広淵は禄を剝がれ終身禁錮。
二月　大阪町奉行与力中斎大塩平八郎反乱し、三月　自殺。四月　将軍家斉　職を家慶に譲る。
六月　アメリカ船、浦賀に入港　奉行これを砲撃する。
この年　イギリスではヴィクトリヤ女王即位し、カーライルの『フランス大革命』刊行される。
天保九年戊戌（一八三八）　小太郎、五歳。松平信正「南冠集序」に、
　幼にして頴悟、嬉戯するに群児と異る。翁山、喜びて曰く、斯の児かならず詣るところあらん、と。
というのは、このころのことを指すのであろうか。
天保十年己亥（一八三九）　小太郎、六歳。
五月、幕府は崎山渡辺登　高野長英らを捕え、十二月、崎山を蟄居　長英を終身禁獄に処する。
天保十一年庚子（一八四〇）　小太郎、七歳。
清国でアヘン戦争おこる。
天保十二年辛丑（一八四一）　小太郎、八歳。藩校に入る。
一月、徳川家斉死ぬ。三月　徳川斉昭、大砲を鋳造。五月　大老井伊直亮やめる。天保の改革

はじまる。八月、水戸藩、弘道館開設。十月、崎山　自殺。

天保十三年壬寅（一八四一）　小太郎、九歳。

十二月　松平信義　藩主となる。

天保十四年癸卯（一八四三）　小太郎　十歳。学業大いに進む。

二月、前藩主松平信豪致仕し　図書頭と称し　以後江戸に住み　慶応元年死ぬ。十二月　オランダ国王、将軍に開国勧告の手紙を送る。

天保十五年甲辰（一八四四）　小太郎、十一歳。

三月、フランス船、琉球に来航。五月、幕府は徳川斉昭に謹慎を命じる。七月　オランダ軍艦長崎に来航、開国勧告の国書を幕府に提出。十一月、斉昭の謹慎を解く。十二月二日「弘化」と改元。

弘化二年乙巳（一八四五）　小太郎、十二歳。

三月、江戸伝馬町の獄舎火災　避難のため釈放された高野長英は帰獄せぬ。五月　イギリス船、琉球に来航し貿易を強要する。六月　幕府、オランダ国王に返書を送り開国を拒む。梁川星巌玉池吟社を閉じ美濃に帰る。七月　イギリス軍艦、長崎に来航。十一月　朝廷、幕府に命じて皇居建春門外に学習所を建てさせる。

弘化三年丙午（一八四六）　小太郎　十三歳。

一月、天皇死ぬ。二月　孝明天皇践祚。伊豆韮山代官江川英竜、海防意見を幕府に提出。閏五月、アメリカ東インド艦隊司令長官、浦賀に来航、通商を求める。幕府はこれを拒む。六月、フ

ランスインドシナ艦隊司令長官、長崎に来航。オランダ船、長崎に入港、風説書と幕府依頼の武器を持参。八月、天皇　幕府に勅して海防を厳重にさせる。十月　幕府　所司代を通して外国船来航の状況を朝廷に伝える。十二月、梁川星巌　京都に下居。

弘化四年丁未（一八四七）　小太郎　十四歳。

二月　幕府　相模　安房　上総沿岸の警備を厳にする。六月　オランダ船、長崎に入港し幕府の外交につき忠告する。秋　梁川星巌に「菊花寿酒応華頂親王」（遺稿巻二）の作がある。華頂親王とは青蓮院法親王のことで　星巌と同院との関係がこのころから密接する。

弘化五年戊申（一八四八）　小太郎　十五歳。

二月二十八日、「嘉永」と改元。三月から四月にかけて外国船が各地沿岸に出没。

この年、ヨーロッパでは「共産党宣言」が発表され　フランスで二月革命、ドイツで三月革命があった。

嘉永二年己酉（一八四九）　小太郎　十六歳。

閏四月、イギリス軍艦　相模沖に来航、江戸湾を測量して下田に入港。八月、幕府　各藩に沿岸防備に関する調査報告を命じる。

嘉永三年庚戌（一八五〇）　小太郎　十七歳。三月八日　祖父魚人死ぬ。年七十八。

四月、天皇、七社七寺に外患を除くよう祈誓させる。六月　オランダ船　長崎に入港し風説書を提出して、アメリカが日本と貿易を開く意志のあることを告げる。十月、高野長英自殺。

この年、清国に太平天国の乱おこる。

嘉永四年辛亥（一八五一）　小太郎、十八歳。
嘉永五年壬子（一八五二）　小太郎、十九歳。
三月、青蓮院に尊融法親王入室。法親王は尊王攘夷派の有力人物で　のち還俗して久邇宮朝彦親王とよばれる。徳富猪一郎『維新回天史の一面』（昭和四年刊）はその伝記で親王と梁川星巌との関係についてもかなり詳しい。四月　星巌　丹波亀山の天台宗光岩寺僧大槁默仙を訪ね、保津川に遊ぶ。默仙は「唱蟾」の号で知られ　尊王攘夷派で　維新ののち還俗して官吏となった。五月　幕府　彦根藩に浦賀警備を命じる。六月、ロシヤ軍艦、下田に来航。七月　亀山藩主の女昌子、彦根藩主井伊直弼と結婚（『市史』による。今堀文一郎『井伊直弼』はこの結婚を弘化三年五月のこととする）。八月　オランダ商館長　明年アメリカ使節が来航し開国を要求することを予告する。九月　明治天皇生れる。十二月、青蓮院の宮　天台座主となる。以後しばしば参内外交　内政につき建言する。この建言に星巌の提供した情報や意見がかなり加わっているだろう。
（この年、フランスではルイ・ナポレオン皇帝となる。
嘉永六年癸丑（一八五三）　小太郎　二十歳。三月　京都に出て梁川星巌に学ぶ。星巌は六十五歳　表面は詩人として振るまっているが　尊王攘夷派のイデオローグとしての活動にいそがしい。
六月、アメリカ東インド艦隊司令長官が遣日国使として浦賀に来航　国書を提出。将軍家慶死ぬ。七月、幕府、アメリカの国書を諸大名に示し意見を聞く。ロシヤ使節極東艦隊司令長官、長崎に来航。十月　徳川家定、将軍となる。徳川斉昭　大砲七十四門を幕府に献ずる。

この年　清国では太平天国軍が南京を占領。トルコ　ロシヤに宣戦。

嘉永七年甲寅（一八五四）　小太郎、二十一歳。

一月　アメリカ国使また浦賀に来る。三月　幕府　日米和親条約に調印。下田　箱館二港を開く。ロシヤ国使また長崎に来る。幕府、カラフト国境および通商に関する覚書を渡す。下田で海外密航を企て失敗した松陰吉田矩方とらえられる。四月　京都大火　皇居炎上　天皇　賀茂社に、ついで聖護院に、さらに桂離宮に移る。幕府　井伊直弼に京都警衛を命じる。松陰の密航に関し家山佐久間啓とらえられる。九月　オランダに対し下田、箱館二港を開く。十一月二十七日「安政」と改元。十二月、幕府　日露和親条約に調印。

この年、小野湖山は藤森弘庵『春雨楼詩鈔』を刊行。イギリスとフランス、ロシヤに宣戦。

安政二年乙卯（一八五五）　小太郎、二十二歳。

三月　幕府　朝旨により　諸国寺院の梵鐘を毀し銃砲に改鋳するよう布告。イギリス艦隊　箱館に入港。大橋默仙、亀山の金輪寺に転住。五月、ドイツ船　下田に入港。六月　オランダ　幕府に汽船などを贈る。幕府、諸大名、旗本に洋式調練を命じる。十月　江戸大地震　水戸藩の東湖藤田彪ら圧死。十二月、幕府　日蘭和親条約に調印。

この年　パリで万国博覧会が開かれる。

安政三年丙辰（一八五六）　小太郎、二十三歳。

八月、アメリカ総領事着任。九月　斎藤拙堂入洛、その送別宴に梁川星巌　陶所池内大学　頼鴨涯ら出席。十月　ロシヤ使節、下田に来航。幕府　老中堀田正睦を外国事務取扱　海防月番専

任とする。このころ鴨涯・雲浜梅田定明　奎堂松本衡ら金輪寺で謀議。

この年、星巌『星巌戊集玉池吟社詩』刊行。ヨーロッパではパリ平和条約成立。

安政四年丁巳（一八五七）　川太郎　二十四歳。

二月、藤森弘庵入洛し、頼鴨涯　僧月性らと会う。三月　弘庵また入洛し、梁川星巌　梅田雲浜らと会う。八月、星巌宅で鴨涯　雲浜らしばしば会合。十月　アメリカ總領事　将軍に謁見し国書を提出。十二月、幕府、所司代を通じ、アメリカとの通商条約を結ぶべきむね奏し、朝廷、幕府に開港の下可を勅諭。幕府　改めて通商条約締結の事情を奏し、また諸大名に登城を命じ　通商条約についての意見を求める。このころ外交問題にからみ将軍継嗣問題がおこり、その候補として一橋慶喜と徳川慶福とを推す二派がしのぎをけずった。慶喜は水戸の徳川斉昭の子ですでに年長じ賢明であり、慶福は紀伊の人だが（紀伊の人だが）将軍家斉の孫で将軍家には最も血統が近い。

この年、清国は英　仏連合軍によって広東を占領された。

安政五年戊午（一八五八）　小太郎、二十五歳。

一月二十一日、老中堀田正睦、外国処置奏上のため上京。この月、信州で蟄居中の佐久間象山が禁をおかして書を梁川星巌におくり、アメリカとは国防整備ののち対等条約を結ぶべき意見書を公家に通じるよう依頼。星巌は池内陶所にはかり関白九条尚忠に提出。

二月五日　堀田老中着京。九日、参内。二十三日、勅問の趣旨を承ける。

三月五日、アメリカ總領事、仮条約調印を促す。六日、象山また書を星巌に寄せる。二十日朝廷、堀田老中に仮条約不可の勅答を示す。

四月五日、堀田老中、京都を発し　二十日、江戸に帰着。二十三日、井伊直弼　大老となる。
二十五日、幕府　諸大名に勅答を告げ意見を求める、この月、小太郎、
江戸に上り小野湖山等と時事を論ず。（丹波史）
此度丹波亀山藩士奥平小太郎東下に付、書帖相托候。小太郎之親切有志之人、且先には要路に居て鯁骨忠直也。小太郎も有志之者、右に付、京都此節之始末　細に相談置候間　御聞可被成候。（梁川星巌　安政五年四月朔、小野湖山宛書状。梁川星巌全集第五巻）
梁川星巌書を付し小野長愿に贈る。長愿後を接見し論学時を移すといふ。長愿と倶に勝野豊作を訪ひ時事を論じ一見旧知の親を結ぶ。（人名辞書）
勝野豊作、名は正道　一に森之助といい台山と号する。幕臣阿部四郎五郎に仕え、尊皇攘夷派のひとり。
五月
奥平小太郎東下に付　御細書逐一拝見　……当地も一向引立候気色無之　彦根侯大老職、土岐丹州　川路抔転役、米人も一先下田之退申候、追々有志之士無之　何分正論家も追々減少致し、此末如何と不案心之事に御座候　……（勝野豊作、安政五年五月十日　梁川星巌宛書状。梁川星巌全集第五巻）
この月　小太郎
白光に謁り、水戸に赴き、藩士高橋多一郎を訪ひ時事を論評し　居ること数日、多一郎深く其志を愛し、会沢恒蔵、豊田彦次郎　青山延光等の有志と交游す。尋で西山に至り光圀の廟

に奏す。（人名辞書）

高橋多一郎、名は愛諸。八月八日の密勅降下の水戸側における画策者といわれる。会沢恒蔵、名は安　正志斎と号し、彰考館總裁および郡奉行。『新論』等の著がある。豊田彦次郎、名は天功　松岡と号し、彰考館總裁・『靖海全書』等の著がある。青山延光　彰考館編修總裁　弘道館教授頭取、維新後　政府に仕え大学中博士。これら水戸の人物については『安政紀事』、山川菊栄『覚書　幕末の水戸藩』（昭和四十九年刊）などに論評がみえる。

六月十九日、幕府、日米修好通商条約調印。二十四日　徳川斉昭ら登城し大老井伊直弼を詰責。二十五日、紀伊の徳川慶福を家定将軍の継嗣と決定。この月、小太郎

江戸に帰り昌平黌に入る。（人名辞書）

又藤森弘庵に就学す。（丹波史）

七月五日、幕府　徳川斉昭らに謹慎を命じる。六日　将軍家定死没。八日、外国奉行をおく。十日、オランダと、十一日、ロシヤと、十八日、イギリスと、修好通商条約に調印。二十一日将軍慶福　家茂と改名。この月、小太郎、

水戸藩邸に至り勝沢伊太夫を訪ひ　学を論じ時事を語る。（人名辞書）

獅沢伊太夫、名は国維　高橋多一郎の弟。勘定奉行。

八月八日、天皇、条約締結に不満の勅諚を水戸藩などに下す。十日　同じく勅諚を幕府に下す。

二十三日　幕府　外国奉行水野忠徳らのアメリカ派遣を決定。この月、小太郎、

勝野豊作の宅に至り、薩摩藩日下部伊三次に会し交を結ぶ。（人名辞書）

九月三日、幕府　フランスと修好通商条約に調印。四日　梁川星巌死ぬ。七十歳。八日、梅田雲浜ら逮捕。いわゆる安政の大獄で　以後　京都　江戸で尊王攘夷派の志士つぎつぎ逮捕。
十一月十五日、江戸大火。十六日、西郷隆盛、僧月照と入水　隆盛蘇生、月照死ぬ。
十二月十七日、日下部伊三次、薩摩藩獄で病死。伊三次　名は信政。密勅降下に働き、幕府に捕われ藩に移されていた。この月　丹波亀山藩主松平信義　大阪城代となる。
安政六年己未（一八五九）　小太郎　二十六歳。
藩侯松平信義、大阪城代たり、藩士募きをもって移を藩邸に召し屋の名を以て仕途に就かしむ。（人名辞書）
二月十七日　天皇、幕府の圧力により、青蓮院法親王ら尊皇攘夷派皇族　公卿を謹慎させる。
四月二十二日　鷹司政通ら尊皇攘夷派公卿謹慎落飾。（このころ小野湖山、吉田藩命により江戸を放逐される。）この月　小太郎
侯夫人を護して大阪に至る。（人名辞書）
五月二十八日、幕府　神奈川　長崎　箱館を開港　ロシヤ・フランス　イギリス　オランダ　アメリカの諸国と貿易を許す。
六月、小太郎　藩主夫人護送の
事を畢って江戸に帰る。（人名辞書）
七月、小太郎
伊勢に赴き、斎藤正謙（拙堂）の門に入る。（人名辞書）

八月二十七日、徳川斉昭に永蟄居　同慶篤に差控、同慶喜に隠居謹慎を命じる。

水戸家老安島帯刀を切腹、鵜飼吉左衛門を死刑　鵜飼幸吉を梟首、鮎沢伊太夫を流罪　池内陶所を追放。……岩瀬肥後守（作事奉行、永井玄蕃守（軍船奉行）　並職禄を奪其父家に返し謹慎せしむ。川路左衛門尉（西丸留守居）隠居慎を命ぜらる。皆水戸の隠謀に党すると云ふを以てせ、

（安政紀事）

十月　小太郎

父知素を省み帰藩、祖母井上氏を保養す。（人名辞書）

七日……頼三樹三郎及び松平越前守家臣橋本左内を死罪。　青蓮院宮家臣伊丹蔵人……を中追放。……久我家家臣春日讃岐守を永押込。……　梅田源次郎　日下部伊三次は獄中に死す。勝野豊作は潜遁る。捕獲ることあたはず。十一日松平慶次郎父松平容堂を謹慎せしむ。其家督中堂上方へ不容易事共申遣候趣相聞、京家へ通路之義不埒公儀致方に付云々を以てなり。……廿七日……吉田寅次郎死罪。日下部伊三次の子浴之進　勝野豊作子森之進を遠島、藤森恭助を追放。……廿八日……松平豊前守家臣角平小太郎、処士横山湖山等皆謹慎せしむ。凡八月以降今日に至るまで、内外政治の議論に坐して忠憤憂国の士　刑に処する者　上下男女百余人皆無罪の繫囚なり。而して井伊の決を以て評定所の擬する所より一等を重くし之を処刑すと云。徳川氏の例、評定所の擬する所老中之を軽くする者はこれあり。之を重くすることは未曽て有らざる所なりと云。（安政紀事）

十一月。

幕府、藩に命じて穆を幽せしむ。其命文「家来奥平小太郎如何の趣相聞永押込申付」と。藩侯大阪城代たるを以て嫌を避け即夜穆を幽囚す。当時幕府勤王の有志を追求すること厳急なり。穆　累の父に及ばんことを虞り、預め往復の書簡等は密に焼却して其跡を晦す。此時浦吏家に就き之を索るも終に得ず。知素教訓不淑に坐して職を褫ひ　禄を剝られて閑居す。藩吏、穆を糺弾すること数回、敢て他事を言はず。陳ずる処は朝家は人神の主なり幕府は飽まで尊崇敬順せざるべからず、若し然らずして賄賂等を用ひ非理の施設を朝廷に求むるが如きは固より尊敬の道を失ふのみならず、大義決して立たずとの趣旨を学友と談論せしのみと。幽囚五十日風雪に感じ病勢劇し、尚能く詩を賦す。（人名辞書）

十二月七日、青蓮院法親王、相国寺子院に永蟄居。この月　亀山藩、小太郎の

萬病を以て獄を出して一室に幽す。（人名辞書）

安政七年庚申（一八六〇）　小太郎　二十七歳。

一月　軍艦奉行木村喜毅　軍艦操練所教授勝安芳ら咸臨丸でアメリカに向う。

三月三日、水戸　薩摩の浪士　井伊直弼を桜田門外に殺す。六日　小太郎の父知素死ぬ。

亀山藩老奥平枕山殺す。（丹波史）

穆大いに哭し父病で養ふを得ず死して葬る能はず天下不孝の子予より甚しき者なしと。（人名辞書）

十八日、「万延」と改元。二十一日、小太郎、高橋

多一郎父子大阪に屠腹の状を看護者に聞き一悲一喜良久うして曰く幕府茲に斃れんと。（人

名辞書）

閏三月二十日、小太郎

病重りて歿す。殯命じて葬を禁じ　其屍を埋めしめ其死を幕府に禀す。（人名辞書）

小太郎の死の日を『人名辞書』は「三月二十日」とするが、ここでは墓誌に従う。（この日は陽暦では五月十日にあたる。

井伊の未だ禍に遭はざる、長野主膳等皇女降嫁の事を謀る。十一月朔日幕府之を令す。此月金一万五千両を公卿に贈る。以て其事を成さんとす。廿九日福坂淡路守老中を罷。十二月廿八日松平豊前守（攝城代）より老中となる。初め間部の上京朝廷を欺くに詐言を以てし　鎖国の旧制に復せんとす。朝廷之を以て姑らく幕府のする所を見る。沈静以て之を待者既に数十月。幕府一つも修攘の意なきを察し之を責せんとす。老中等之を聞て大に懼る。依て和宮の降嫁を要請して已まず。曰く、之を以て公武の一和を表して海内の人心を鎮め、而後に鎖攘の事に従はんと。朝廷之を要するに期限を以てし　又将軍の上洛を命ず。老中等復詐て之を誓ふ。是切に和宮降嫁の約を成んことを望むのみ　実に鎖攘の意あるに非るなり。且之を以て日月を遷延せんとす。（安政紀事）

万延二年辛酉（一八六一）　小太郎死後一年。

二月十九日、「文久」と改元。八月、和宮降下勅許。十二月、和宮降下。

文久二年壬戌（一八六二）　小太郎死後二年

二月、天皇、書を幕府に与へて攘夷を命ずる。

公主既に尚し、公武実に一和す。此時に及んで既往は咎めざるの教によりて天下に大赦し三大臣の幽閉を赦し列藩臣の禁錮を赦し有志の士の連坐せる者を赦さんことを通告、幕府以て此挙を行しめよ。（安政紀事所掲文久二年宸翰）

十月　朝廷幕府に命じて奥平小太郎を特赦す。（丹波史）

十二月二十五日、朝廷幕府に命じ其罪を特赦し墓石を建つるを許す。（人名辞書）

「其罪」とは、小太郎の罪をさす。

文久三年癸亥（一八六三）　小太郎死後三年。

二月、松平信義外国御用取扱となる。六月、松平信篤致仕し信正襲封し図書頭に任ぜらる。金輪寺大橋喝蟾山内に頼三樹の招魂碑を建つ。九月、松平信義老中を辞し移封百年祝賀会を催す。十一月、松平信義外国御用取扱となる。（丹波史）

文久四年甲子（一八六四）　小太郎死後四年。

二月二十日、「元治」と改元。

元治二年乙丑（一八六五）　小太郎死後五年。

一月二十七日亀山藩主松平信正襲ぎ奥平父子の冤を雪ぎ復禄す。（丹波史）

藩侯松平信正、知素及び穆の冤を清め、其志を表し、嗣子知善を以て父祖の職禄に復す。（人名辞書）

四月七日、「慶応」と改元。

明治三十四年辛丑（一九〇一）　小太郎死後四十一年。

十二月二十五日、『南冠集』発行。
この「十二月二十五日」は陽暦である。

三

南冠集序

幕府の李世、奇獄興り、宛罪亡り、士の横死する者　勝げて数ふ可からず。而して吾が卑平穆焉に与る。穆　小字小太郎、号古海。祖翁山、父枕山　儒を以て亀岡藩に仕ふ。穆、幼にして穎悟　嬉戯して群児と異る。翁山喜びて曰く「斯の児　必ず詣る所あらん」と。弱冠　笈を負ひて東遊し、昌平黌に入り　又　学を藤森弘庵に受く。是に由り一時の賢豪と交を締ぶを得たり。戊午の獄起るに及び　遂に狂狂（狂）に投ぜらるること歳余、痛憤疾を成す。先考清徳公　其の才を惜み、宥して詣を其の家に幽す。穆　国を憂し親を傷み、終宵寐ねず。端坐して柱に倚り、毎に平旦（旦）に達す。手ずから紙を捻り、其の作る所の詩文を写し、命じて「南冠集」と名づく。精神の注ぐ所、辞は直に意は達に、往々人を感乎せしむ。嗚呼　穆の才を以て、其をして今の盛世に遇はしめば、則ち其の造る所、豈に是に止まらん哉。惜しい乎、天之に年を假さず、終に獄中の鬼たらしむる也。然れども区々たる一小藩にして　気節慷慨、穆の如き者の出づる有る、亦、吾が亀岡の栄なる歟。頃者　大石　鋤柄　柴田の諸子、将に刻して以て不朽に伝へんとす。余、

先考の意を推し　為に一言を叙ぶる云。　　竜峰松平信正撰す。

・狂狂　獄舎。　・清徳公　松平信義。　・感泣　感動というほどの意。

序

時気の将に変遷せんとする也、大風起り、暴雨降る。万物を震蕩し、然る後に気候一新す。此の際に方り　鬼木頑草固より宜しく摧折すべし。而れども良木芳草も或ひは毀損を免れず。是れ洵に傷む可き也。時勢の変遷　何を以てか此に異らん。近時覇政の将に王道に変遷せんとする也大獄起り　干（干）戈動く。一世を騒擾して　然る後時局一新す。是の時に当り光徒頑民固より当に誅滅に就くべし。而れども忠臣良士の災害に罹る者も亦少からず。吾が友興平古海の如き、其の一也。古海名は穆。小太郎と称す。旧丹波亀山藩士。余と同じく昌平黌に学ぶ。人と為り忠実謹飾（飾）にして、而して慷慨勤王の志有り。嘗て水府に遊び　志士と交を締ぶ。覇府の嫌疑を受け　藩主之を屏し、憂悶以て死す。謂はゆる忠良を以て災害に罹る者　豈に傷まざる可けん哉。頃ごろ同藩の人柴田忠克等将に其の獄中草する所の『南冠集』を刻せんとし、余に序を徴す。于嗟余也当時覇府の陪隷為り。勢之を救護せざるを得ず。然れども其の心何ぞ曾て尊王を忘れん。是を以て一時譴責を受くと雖も　而れども久しからずして宥赦せらる。今は則ち反って天朝の寵用を蒙るも　亦猶天道の変遷するがごとし。時気苟も定らば、一視同仁、彼此の間に私無し。杜少陵の謂はゆる「盗賊も亦王の臣」是れ也。然りと雖も余輩は鬼木頑草にして、而も僥倖を獲し者なる耳。古海の良木芳草を以て、今に存せば　其の寵用果して如何ぞ也。仲尼曾て陰谷を過り

歎じて曰く「蘭は当に王者の香為るべきに、今は乃ち衆草と伍を為す」と。夫れ蘭と衆草と伍を為すすら　且つ歎ず可し。況んや衆草栄えて而して蘭の枯るるに於てを乎。但だ幸とする所は、其の遺草を刻して　これを万世に寿す。古海の王者の香、是に於て乎不滅ならん矣。是を序と為す。　明治庚子春王の一月。　東宮侍講文学博士三島毅撰す。

序

『南冠集』は　旧亀岡藩士奥平小太郎が獄に在りし時の詩也。同藩の士勅柄　大石　柴田の三子　求って予に序を請うて曰く「小太郎　少にして大志有り。始め藤森弘庵を師とし、後頼三樹を友とす。広く志士と交を結び、尊王の正議を主倡す。三樹の刑死するに迄び、小太郎も亦嫌忌に遭ひ、逮はれて獄に下り、悲憤疾を成す。年僅に廿六。翼（翌）年を以て歿す。実に庚申某月也。某等其の志を抱いて寃死せしを哀む也。此の集を伝へ、以て不朽を謀らんと欲す。蓋はくは子よ一言を賜ひ、其の幽光を発せよ矣」と。予一読して未だ終らざるに、泫然として涙下る。間有りて、三子に謂ひて曰く「嗚呼、予も亦嘗て諸を三樹に聞けり。曰く『吾が友の奥平某、予より少きこと数歳。才は雄に志は壮。吾れ以て畏友と為し、将に共に為す所あらんとす』と。言猶耳に在り。而して一は刑場に死し、一は縲紲に歿す。何ぞ天の二人の命を尊ぶの酷なるや。然れども天定は人に勝る。嚮の正議の士、多く聖朝の旌褒する所と為る。則ち小太郎も亦以て瞑す可し矣。予今此集を閲るに、其の才の雄と志の壮と、紙上に溢出す。而して三樹の言の我を欺かざりしを知る矣。予は唯だ小太郎其の人の如き者をして　生を全うして力を聖朝に尽す能はざらし

めしを憾むなり」と。是に於て予序す。　　正五位谷鉄臣撰す。

・松平信正の序は多分代作で　代作者は、その文体から見て、あるいは三島毅であろうか。松平　三島　谷の序を読んでふしぎな感じがするのは、小太郎が昌平黌に学んだこと、あるいは藤森弘庵を師としたことを記しながら、梁川星巌を師として学んだことに触れぬ点である。種々の臆測を誘うが、ここには慎んで疑問を注記するだけにする。

松平信正は亀山藩最後の藩主で明治四年一月　山陰鎮撫使が亀山にはいると、いちはやく帰順した。

三島毅（一八三〇―一九一九）字は遠叔、通称は貞一郎　中洲と号した。備中都窪の人。山田方谷　斎藤拙堂に学び、二十八歳で昌平黌に入り、佐藤一斎　安積艮斎に業を受け、三十歳で松山藩に仕えた。明治五年法官となり、十年官を罷め家塾二松学舎を開き、ついで東京師範学校　東京大学教授　二十九年東宮御用掛　ついで侍講　のち宮中顧問官。重野成斎　川田甕江と並んで明治の三大文宗とよばれた。

谷鉄臣（一八二二―一九〇五）字は百練。太湖と号し彦根の人であることは、さきに記した。明治元年から藩政に当り　三年、権少参事　四年、大蔵大丞、のち宮内省京都支庁御用掛。

自序

己未仲冬穆得罪幕府禁錮終身　公文命吏下獄治其事吾意古人處厄之際若演于羑里謳歌於陳蔡尚矣

下及臨刑神色不變彈琴賦詩之類不一而足其從容自得之狀千歲之下猶可想見矣今以穆之不肖其能至於古人與否可知已其志之欲至于至豈有異哉茲收拾獄中所口占詩若干首題曰南冠亦以見其志之所存云爾　安政六己未冬藏六山人誌

自序

己未仲冬、穆　罪を幕府に得　禁錮終身、公また吏に命じ　獄に下して　その事を治む。われ意へらく　古人厄に処するの際　易を羑里に演べ　歌を陳蔡に謳ひしがごとき尚し。下は刑に臨みて神色変ぜず　琴を弾じ詩を賦するの類に及び　一ならずして足し。その從容自得の狀　千歲のもと　なほ想見すべし。いま穆の不肖をもって　そのよく古人に至らんや否や、知るべきのみ。その志の至るべきに至らんと欲する、あに異あらんや。ここに獄中に口占むところの詩若干首を收拾し　題して「南冠」といふ。またもってその志の存するところを見すのみ。　安政六己未冬藏六山人しるす。

易を羑里に演べ　羑里は　西国殷代の獄舎の名。殷の紂王が西伯（後に周の文王といわれる人）の名声を憎んでここに囚えた。西伯は獄中で易の八卦を増して六十四卦にした、という伝説が『史記』周本紀に見える。　・歌を陳蔡に謳ふ　陳も蔡も春秋時代の小国の名。孔子が蔡にいて大国の楚に招かれようとしたとき　陳　蔡の大夫がそれを阻止しようとして孔子一行を囲み糧道を絶ったが　孔子の講誦絃歌は衰えなかった　という話が『史記』孔子世家に見える。

穆の不肖をもって　不肖のわたしに古人と同じことができそうにないのはわかりきったことだが、古人の到達したところまで行ってみようとする志においては、わたしも古人とかわりは

ないはず　というほどの意。

例　言

一　『南冠集』は　奥平古海の獄中に在りて作る所　蔵して旧藩主松平竜峰公の文庫に在り。公嘗て其の散逸に帰せんことを恐れ　儒臣大石丈実翁に命じ　校訂編纂せしむ。会たま翁は徳島県中学より聘せらるるに応ず。乃ち克に命ず。克は浅陋を顧みず、旧臣話友と相謀り、拮据めて事を畢へ　以て上梓するを得たり。亦克の幸とする所也。

一　此の編　篇什太だ少しと雖も、皆是れ憂世の至情の溢れて詩文に発せし者　以て古海の平生を想見するに足る矣。頃ふに覇府の末造に方り　有志の士、時政の妥靡不振を憤り　相共に国事に奔走す。明治中興に及び　多くは皆贈位恩爵の栄を荷へり。而るに古海独り獄中の鬼と為り　而して其の遺族も亦甚だしくは振はず　豈に哀れならず哉。則ち区々たる遺稿の編纂　固より以て古海を慰むるに足らずと雖も　其の遺烈を伝ふるに庶幾き乎。

一　古海の族宗潤卿の伝一篇　三島中洲翁の著て撰せし所、亦蔵して公の文庫に在り。叙事詳密　以て君が家の系統来歴を見るに足る。今此集を刻するに及び　請ひて附録と為し　巻末に載す。

一　此の集の成るや　井内義一多く同盟を募り、田中仲文専ら会計を理め、二氏倶に与って力有り。併せ録し以て其の労を表す云。

明治三十四年十一月　　後学　柴田忠克　謹しみ識す。

南冠集

古海與平小太郎著

（本文第一葉表）

在獄咏雪
用駱賓王
咏蟬之韻

獄に在りて雪を詠ず
駱賓王が詠蟬の
韻を用う

南冠形影瘁
朔吹雪威侵
携手共誰語
擡頭空獨吟
雲垂天黯々
人定夜沈々
將彼玲瓏影
照來高潔心

南冠　形影　瘁せ
朔吹　雪威　侵す
手を携へて誰と共にか語らん
頭を擡げて空しく独り吟ず
雲垂れて　天　黯黯
人定まって　夜　沈沈
彼の玲瓏の影を將って
照し来れ　高潔の心

・駱賓王咏蟬　三―四頁を見よ。　用韻　「在獄詠蟬」の第二句の「侵」、第四句の「吟」、

第六句の「沈」　第八句の「心」の四つの平声侵韻の文字を、この詩の同じ場所に使って押韻したことを指す。　南冠　三一四頁を見よ。　形影　肉体と影ぼうし。この語は古くから用いられるが、ここでは陶淵明の「形影神」という三首の連作詩から採ったのだろう。「形影神」は人生の苦悩について肉体と影ぼうしが対論し　神すなわち精神が判決を下すという構成。小太郎の作では対論判決の意図はないが、第八句の「高潔心」が神にあたる。　卒　やつれる。『詩経』小雅・北山に「或は燕燕として居息し　或は尽瘁して国に事ふ」（同じ王臣でもぶらぶら休んでる奴もあれば、病みおとろえるまで国のために奔走する者もいる）　朔吹　北風。陳の張正見「賦新題得寒樹晩蟬疎」に「朔吹梧桐を犯す」　雪威　見なれない語だが「霜威」あたりからヒントを得て新たに造ったのであろう。それなら、雪のきびしい冷たさ。　・携手　手をとりあう　『詩経』邶風・北風に「北風其れ涼たり　雪雨ること其れ雱たり。恵して我を好せば　手を携へて同じく行かん　其れ虚其れ邪　既に亟かにせん」（北風がほら冷たい、雪が降るほらずんずん、やさしくわたしにしてくだされば、手をとってお伴したいが、うそつきと意地悪ばかり、もうぐずぐずはしておれぬ）なお「詩序」は「北風は虐を刺るなり」といい「集伝」は「北風雨雪、以て国家危乱将に至らんとして気象愁惨なるに比するなり。故に其のあい好するの人とともに去って之を避けんとす」という。　・共誰語　その悲しみを語りたく思ってもわが影の外には誰もおらぬ。　・擡頭　頭を高くあげる。唐の皮日休「病孔雀」に「煙花媚ぶと雖も思ひ沈冥し、酋ほ自ら頭を擡げて翠翎を護る。強ひて紫簫を飛いて舞はんと欲するが如く　困しみ紅樹に眠って屏に依るに似たり。因って思ふ桂蠹の肌骨を傷つけしを、為に憶ふ松鶴の性霊を損ぜし

を。尽日春風吹けども起たず、細毫金縷一時星星」　空獨吟　空は人けのないところで、獨吟ひとり詩を吟じる。白居易の「秋雨中贈元九」に「怪しむ莫れ独吟して秋思苦しきを」　雲垂　雲がたれこめる。古くから使われた語だが、宋の朱熹に「雲垂天闊歳将闌」の句があるそうで　小太郎はそれを意識していたかもしれぬ。「垂」は垂の俗字。　黯々　くらいさま。魏の陳琳の「遊覧」に「肅肅として山谷に風ふき　黯黯として天路は陰れり」　人定　人が寝しずまる。『後漢書』来歌伝に「臣、夜人定りし後　何人かの賊傷する所となる」　沈々　夜のふけるさま。李白「白紵辞」に「月寒く江清く夜沈沈」　玲瓏　あざやかにうるわしいさま。唐の呉融の「雪十韻」に「月交って都て浩渺　日射して更に玲瓏」。小太郎の「彼の玲瓏の影」をはじめは月の光をさすのかと思った。しかしこの詩は「雪を詠」ずる作なのだから、月ではなく雪なのであろう。第二句でうたわれる雪は　北風と共に来て南冠の卒労した形影を威圧侵犯するものだった。雪は、しかし　常にそのようなものとしてあるのではない。呉融のうたうように月が照りそえばはるばると　日ぐ射さばうるわしく匂いだつのだ。「降れ降れ小雪、丹波の小雪」と幼い日にうたいはやした楽しいもの　それ雪でなければなるまい。だが今はそのおもかげもない。おもかげがないのはここが牢獄だからだ。牢獄は人の住むところではない。人の住むべきでないところに、人を閉じこめて「ひとや」とよぶのは　よく人の心にひがごとがあるからではないのか。・高潔　魏の嵇康の作と伝える「井丹賛」に「井丹高潔　栄貴を慕わず　五王に抗節し、非類に交わらず」という。牢獄に閉鎖されたのは権力者に反抗したため、だ。いまなお開放されないのは不義の徒と妥協せぬため、だ。かつて栄貴を慕わなかったといえば偽りになるであろう。だが、

儒徒として正当な努力によって栄貴に到達しようとは思っても、栄貴を求うがために節をまげたことはない。宋の欧陽脩は「醉翁亭記」に「風霜高潔」といった。風霜すら高潔ならば、風雪もまたそうありえぬはずはない。日月によって玲瓏となったその光輝あるおもかげをもって、牢獄の暗黒に堪える南冠の心を照らして高潔ならしめよ。

南国の冠をつけた囚人の形も影もやせおとろえ　北風と雪のきびしい冷たさが侵入する、手をとって語るべき誰がいようか　だが頭をあげて空しく独り詩を吟じるのだ。雪垂れて天はどんより暗く、人寝しずまって夜はしんしんとふけてゆく。あのうるわしいおもかげをもって　照らすがよい高くいさぎよいこの心を。

無題

白面書生不識津
投淵誤觸臥龍鱗
放言回首無成事
叢讒傷心有老親
耿々青燈風雪夜
鬢々蒼髯楚囚身

無題

白面の書生　津を知らず
淵に投じて誤って触る臥竜の鱗
放言して首を回すに成事なく
叢讒　心を傷ましめて老親あり
耿耿たる青燈　風雪の夜
鬢鬢たる蒼髯　楚囚の身

（本文第一節裏）

黨論他日比元祐
果是碑中第幾人

党論　他日　元祐に比せんに
果して是れ碑中第幾人ぞ

・白面書生　年少で経験に乏しい書生。『宋書』沈慶之伝に「国を治むる譬へば家を治むるが如し。耕すにはまさに奴に問ふべし。織るにはまさに婢に問ふべし。陛下いま国を伐たんと欲して白面の書生輩とこれを謀る。事なほ由ってか済らん」　不知津　川をわたろうとして渡し場を知らぬ。事をなそうとしてその手段を知らぬこと。孔子が旅行中　隠者の長沮と桀溺が田を耕しているのにぶつかった。子路に渡し場をたずねさせた。長沮「馬車の手綱をとっているのは誰かね」子路「孔丘です」「魯の孔丘かね」「そうです」「じゃあ渡し場は知ってるだろう」桀溺に問うと、桀溺「あんたは誰じゃ」「仲由です」「魯の孔丘の弟子か」「そうです」「どんどん流れる、天下みなその通り。誰といっしょにそいつを変えることができよう。君主を選り好みする人についてるより、世を捨てた人につく方がましじゃないかな」……こんな話が『論語』微子篇に見える。長沮のことばは反語で、実際の渡し場を見つけることさえできぬ書生の孔子に天下国家を治めることなどできるものか　と皮肉っているのだ。この第一句は　おそらく小太郎が逮捕されたとき藩の当路者が小太郎にむかって言った評語を反映しているのだろう。　・投淵　淵に飛びこむ。『荘子』譲王篇に「舜は天下を以てその友北人无択に譲らんとす。北人無択曰く　異い哉、后の人と為りや　畎畝の中に居りて堯の門に遊ぶ。是の如くにして已まず、又その辱づべき行ひもて吾を漫さんとす。これに見はんことを羞づ　と。因って自ら清冷の淵に投ず」北人

無択の行動は高潔にちがいないが、世人には無謀と感ぜられるだろう。　・誤觸臥龍鱗　臥竜はねむっている竜、英雄にたとえる。竜はおとなしい動物だがのどの下に逆さに生えたうろこがあってうっかりさわると怒って人を殺す、という。『晉書』嵇康伝「鍾会、文帝に言ひて曰く、嵇康は臥竜なり、と」。『韓非子』説難「夫れ竜の虫たる柔にして押れて騎るべし。然れども其の喉下に逆鱗あり。若し人これに嬰らば必ず人を殺す」　放言　不遠慮にいう。『後漢書』孔融伝「跌蕩にして放言す」　・回首　ふりかえる。『史記』司馬相如伝「回首して内に面ふ」

・成事　事を完成する。『史記』高祖本紀に「劉季は固より大言多く、成事少し」　・嚴譴　きびしい咎め。唐の宋之問の「至端州駅……」に「逐臣北地に厳譴を承く」　傷心　心を痛める。『史記』蒯成伝「ここに傷心する者あり。然れども篤厚の君子と謂ふべし」　老親　老いた親。岑参「送張子尉南海」に「南州の尉を択ばざるは　高堂に老親あればなり。」　・耿々　斉の謝朓の「暫使下都夜発新林至京邑……」に「秋河曙耿耿」というようにキラキラ輝くさまをいうが「詩経」邶風・柏舟に「耿耿として寝ねられず　隠憂あるが如し」という目が冴えてねむれぬさまをも含めているだろう。そうして同じ詩の「我が心は石に匪ず　転ずべからざるも、我が心は席に匪ず、巻くべからざるも、威儀棣棣として　逆ふべからざるも。憂心悄悄、羣小に慍らる、閔に覯ふこと既に多く　侮を受くること少なからず、静かに言に之を思ひ、寤めて辟つこと標たるあり」という心をもここにこめようとしたかもしれぬ。　青燈　炎の青いともし火。唐の李応物の「寺居独夜寄崔主簿」に「幽人寂として寐ねず　木葉紛紛として落つ。寒雨深更に暗く流螢高閣を度る。坐に青燈を対して暁けしむ。還た夏衣の薄きを傷む。寧ぞ知らん歳の方に晏れん

とするを、離居更に蕭索」まして風雪の、暁ける時を知らぬ獄中の夜なのである。・髪々　髪のばさばさしているさま。宋の蘇轍に「巾を脱して酒を漉せば鬢髪髪」の句があるそうである。・蒼鬢　灰色の髪。　・楚囚　他国にとらわれている人。一一二頁を見よ。小太郎が生れ故郷である亀山で囚禁されていて自ら「南冠」といい「楚囚」というのは注目すべきだろう。故国がすでに「異国」になった、とする認識がかれの内部で熟成していた一つの徴証であろう。・黨論

十一世紀中国の宋の政界で司馬光の旧党と王安石の新党が対立し党争は激烈を極めた。元祐年間（一〇八六―一〇九三）には旧党の勢力が強かったが、そののち新党が有力となり　一一〇二年、新党は天子を動かし、旧党員の百二十人を「姦党」として石に刻み、翌年「元祐姦党碑」を建て、さらに次の年、「姦党」の決定版として司馬光以下三百九人を定め、蔡京に命じて大碑に書かせ、天下に頒った。いわば〝永久追放者名簿〟である。ここでは　安政の大獄をもし元祐の旧党弾圧にたぐえるなら、自分は「姦党碑」中の第幾人目にあたるであろうか　といっているのである。

主（なま）白い書生（ちく）は世渡りの道も知らず、深淵に飛びこんでうっかり寝ている竜の逆鱗（さかうろこ）にさわってしまった。無遠慮に大言したがふりかえってみれば事は成らず　厳しい咎めをこうむって老いた親に心配をかけたばかり。きらきらとともし火青い風雪の夜、ばさばさと灰色の髪たれかかる楚囚の身。尊王佐幕の党論をあの元祐の政争と比較するとき、わたしは果して〝姦党碑〟中の第幾人にあたるであろうか。

其二

霜威風力滿城横
木葉繽紛埋屋楹
唯有庭松含晩翠
枕頭夜々作寒聲

其の二

霜威　風力　城横に満ち
木葉　繽紛　屋楹を埋む
唯だ　庭松の晩翠を含み
枕頭　夜夜　寒声を作すあり

霜威　霜のきびしい冷たさ。謝朓の「高松賦」に「弱葉は紛として照を凝らし　新藻を競ひて英を抽んづるも　風飈の吹欺を卷き　霰雪の嚴霏を積めば　豈に身を歳暮に凋らせ　令を霜威に受けざらんや」　風力　唐の姚合の「劍器詞三首」其二に「雪光偏へに甲に著き　風力旗を禁めず」　城横　城傍あるいは城隍（城の空濠）というほどの意に用いているのであろう。いずれにしても　まちのほとり。ただ、横には西の意に用いる場合があり　次の詩からも伺えるように亀山の獄舎がまちの西部にあったとすれば　（この城横も城西の意で使用したかもしれぬ。

木葉　楚辞「九歌」湘夫人に「嫋嫋たる秋風に、洞庭波だち木葉下る」　繽紛　みだれおちるさま。陶淵明「桃花源記」に「落英繽紛」というのがこれにあたるが、楚辞「離騒」の「時は繽紛として変易す」（時世は乱れて変化する）の字面を匂わせているのかもしれぬ。　屋楹　屋はいえ、楹は柱。あまり見なれぬ語だが『佩文韻府』に「呉萊観隋王度古鏡記詩」として「金鉛膏沢を拭ひ、絳碧屋楹を穿つ」の句を例示する。　晩翠　冬枯れの時にも緑の色を変えないこと。五代の范質の「戒伐子杲」に「遲遲たる澗畔の松、鬱鬱晩翠を含む」　夜々　唐の岑参

旗

の「胡笳歌」に「辺城夜夜愁夢多からん、月に向って胡歌誰か聞くことを喜ばん」・寒聲さむざむとした声、唐の劉長卿「同諸公登楼」に「千家雲色を同じくし、一雁寒声を報ず」

霜のきびしさ、風のはげしさまちに満ち、木の葉けばけばらばらと家の柱をうずめる。ただ庭の松だけは年のくれにも翠りたたえて、枕べに夜よるに寒ざむと声をひびかす。

其三

禽語蟲聲頻唱我
此中却覺脫塵霜
誰憐西町農夫屈
西町里名農夫在獄十九年矣
日誦東坡居士詩
雪信先傳風牖響
晷痕略記飯鐘時
如今自笑平生拙
空擲杼機憂圃葵

其の三

禽語　虫声　頻に唱我す
此の中　却って覚ゆ　塵霜を脱するを
誰か憐れむ　西町　農夫の屈
西町は里名。農夫　獄に在ること十九年なり。
日びに誦す　東坡居士の詩
雪信　先づ伝ふ　風牖の響き
晷痕　略ぼ記す　飯鐘の時
如今　自ら笑ふ　平生　拙にして
空しく杼機を擲って圃葵を憂ふるを

禽語　小鳥の声。宋の趙師秀の「春晩即事」に「一身求って夢となり、白日徒労を算う。塵土衣を侵して重く、年光鬢に加はって宇し。春深くして禽語改まり、渓落ちて岸沙高し。柳下に釣を垂るる者よ、吾れ今爾曹に媿ぶ」ことばは少しかわるが蘇軾、この詩中にうたわれる東坡居士、に「五禽言」という五首の連作詩がありその序文に「相聖俞、四禽言を作る。余黄州に謫せられ定恵院に寓居す。舎を遠うしてみな茂林修竹　荒池蒲葦　春夏の交　鳥鳴百族　土人多く其の声の似たるものを以て之に名づく。遂に聖俞体を用ゐて五禽言を作る」という。禽言も小鳥の声で、小太郎はこれをも念頭において「禽語」を選んだかもしれぬ。　蟲聲　蘇軾の師ともいうべき欧陽脩に有名な「秋声賦」があり「但だ聞く四壁の虫声唧唧として余の歎息を助くるが如きを」という句が見える。　・吟我　おそらく「吟哦」のことであろう。吟哦はうたうこと。『宋史』何基伝に「読詩の法は、すべからく胸次を掃蕩し浄尽して然る後に吟哦上下し諷詠従容たらば人をして感発せしめ方に功ありとなす」という。『南冠集』の原稿は、獄中で与えられたチリ紙の上に、やはりチリ紙で作ったコヨリをメシツブではりつけて文字とした（松平信正の序を見よ）というから、刊行までの四十年間に点画の脱落があったと察せられ、この詩中の「我」は「哦」の「屈」は「窟」の一部がはがれおちたのかもしれぬ。　塵羈　俗世間の束縛。陶淵明の「飲酒」其八に「吾が生は夢幻の間、何事ぞ塵羈に絆がるるや」なお同人の「帰園田居」其一の「少きより適俗の韻なく、性もと丘山を愛す。誤って塵網の中に落ち、一たび去って三十年」という塵網も同じ意味の似たことば。　・農夫窟　前記のように「農夫の窟」のあやまりであろう。この句に小太郎がつけた注に「西町は里名、農夫在獄十九年なり」というのは、小太郎の囚禁された獄

舎が亀山の西町にあり、そこはあるいは重罪人を收め、その最も重いものは在獄十九年に達する農夫だったのであろう。どのような罪によるのかはわからぬが、亀山藩では農夫への年貢は收穫の五割、時として七割五分をこえたというから、その重税に反抗した農夫だったか、とも察せられる。

・東坡居士　蘇軾。元祐の党争では旧党に属し、いわゆる「姦党碑」中に名を記されたひとりである。宋代の新旧両党の争いはその歴史的評価において近ごろ大きく転換したが、従来は旧党に同情が多く新党にきびしかった。従って王安石は凶悪の人のようにいわれ欧陽脩や蘇東坡は君子人とされた。小太郎もそのような伝統的風習の中で東坡居士を尊敬したのかとも思うが、この詩は、わたしにはわかりにくいものが含まれているので　日々に東坡居士の詩を誦した小太郎の心情にも手がとどきかねる。

・雪信　見なれぬことばだが「霜信」「風信」などの語にならった造語であろう。それなら雪が季節に応じてやってくること。

・風牖　風のふくまど。唐の許敬宗「奉和過慈恩寺応制」に「風牖は花を送り来る」

・暑痕　これも見なれぬことばだが暑は日かげ。獄房の小さな窓からさしこむわずかな日かげが傷あとのように鋭く壁に刻まれているのをうたうためには　この文字を選ばざるを得なかったのだろう。

・飯鐘　飯時を知らせる鐘。似た語に「飯磬」があり陳の沈炯「遊明慶寺」に「馴鳥は飯磬を逐ひ、狎獸は禅牀を繞る」

・杼機　はたおり道具。『文選』郭泰機「答傅咸」に「寒女は妙巧と雖も　杼機を乗るを得ず」とあり、これは傅咸の「倉寒なるも猶ほ手の拙なれば　杼を操るも安んぞ能く工ならん」の句に酬いたもの。郭は魏晋の人で傅に推挙を依頼した。傅がたぶんはげますためであろう「倉乏なう天下手くそときては　機を織ってもうまくあるまい」といい　郭が答えて「そしい女は機織りう

民

まくても、道具がないので使えない。空は寒く時のめぐりの早いこと。まして雁が南へ飛ぶ。裁縫師は鋏やものさしを持っていても、わたしのことなど忘れたらしい。上のお方が身にひきつけて考えてくださらねば、世の男たちも望みはもてめ。まして朝めしのすんだお方に、わたしのひもじさがわかろうか」と答えたのである。小太郎の前の句「如今自ら笑ふ平生拙なるを」はこれをうけて、うまくても貧しければ嘲られたり無視されたりするのだから　いまわたしはもともと下手くそな自分を笑わざるをえぬ、というのであろう。「擲」というのは「掖」と結んで機のひを通わす、すなわち機を織ること。空擲杼機とは出来上っても引きとりてしない下手くそな機を織る、ということであろう。なお「擲掖」には日月の経過のすみやかさの譬があるので、空擲杼機にもまた、むなしく月日のみはすぎゆき、という意をこめるのだろう。　・園葵　園葵と同じで、はたけの野菜。魯の漆室というところに未婚の女がいて毎日なげいているので隣の嫁が結婚したいのなら相手を世話しようというと、わたしは魯の殿さまがきいぼれて太子がまだいとけないことを心配しているのだとこたえる。嫁が笑って　そりゃご家老さまのする心配　女っこにはかかわりない。女、いいえ、いぜん晋のお客を家にとめたら、客の馬が逃げて畑をふみあらしおかげで一年中野菜が食べられなかったの。お上にぐあいのわるいことがあればそのつぐないは民にかかってくるのです。女だからといって避けられましょうか、と言った。こんな話が漢の劉向の「列女伝」に見える。小太郎の第七第八句　在獄十九年の農夫の運命をあわれに思うが、さてかえりみて、武士であり政治家のはしくれであるわたし自身がおのれのわざにもつたなくて、急見をとりあげられるどころかその農夫と同じ獄につながれ、あの漆室の女のような心配だけは

笑われながら人一倍しているべというほどの意であろうか。

鳥のさえずり虫の声しきりにうたう。この中ではかえって世間の束縛からぬけ出せそうだ。たれが憐れに思うだろう西町の百姓宅で（西町というのは町名、そこの宅には百姓で十九年もつながれている人がいる）、日々東坡居士の詩を口ずさむこのわたしを。雪くる便りをまず伝えるのは窓べの風の響き、日かげの刻みでどうやらおぼえた食事時。いまでは自分がおかしくなるもとも と世わたりが下手くそで、役にも立たぬ機織りながら畑の野菜の心配をしていたことが。

其四

禍福無門塞上翁
人間得喪更何窮
懐家雙涙灑南雁
報國一心悲北風
千樹霜深秋爛熳
長天雲盡月玲瓏
此情此況誰能識
野鶴長鳴松露中

其の四

禍福　門無し　塞上の翁
人間の得喪　更に何ぞ窮まらん
家を懐ふ双涙　南雁に灑ぎ
国に報ゆる一心　北風に悲しむ
千樹霜深くして　秋爛熳
長天雲尽きて　月玲瓏
此の情況　誰か能く識らん
野鶴長鳴す　松露の中

（本文第二葉表）

禍福無門　禍や福が来るのに一定の門はなく　ただ人の善悪による。『左伝』襄公二十三年に、「禍福門なく　ただ人の召く所」　塞上翁　幸福や不幸は一定せず交互にその原因となる、ということの譬え。塞上翁とは国境地帯に住む老人の意。『淮南子』人間訓に次のような話がみえる。国境地帯に一人の男がいた。男の飼う馬がとつぜん国境外に逃げた。人たちが気の毒がると男の老いた父が「そうともいえぬ」といった。数月たつとその馬が異民族の飼う駿馬をつれて帰ってきた。人々が祝うと老人が「そうともいえぬ」といった。息子の方は馬好きで駿馬を乗りまわしているうちに落ちてビッコになった。人々が気の毒がると老人が「そうともいえぬ」といった。しばらくして戦争がおこり若者は召集され十人に九人は死んだが、ビッコの息子は召集を免除され老父ともども無事だった。　人間　人間社会。『韓非子』解老に「人間法令の禍を免る能はず」　・得喪　得失。『荘子』田子方に「夫れ天下なる者は　万物の一とする所なり。其の一とする所を得て　焉に同ずれば、則ち四支百体は将に塵垢たらんとし　死生終始は将に昼夜たらんとす。而して能く之を滑すなし。而るに況んや得喪禍福の介する所をや」　・懐家　いえをおもう。　・雙涙　ふたすじのなみだ。杜甫「所思」に「可憐の懐抱人に向って尽し　平安を問はんと欲し使の来るなし。故に錦水と双涙とに憑って、好過す瞿塘灩澦堆」　南雁　南に飛ぶ雁。唐の王勃の「秋夜長」に「遥かに相望めども川に梁なし、北風節を受け南雁翔ぶ」　・報國　国に報いる。唐の陳子昂「感遇」に「時に感じて報国を思ひ　剣を抜いて蒿莱に起つ」　・一代　一途のおもい。『書経』盤庚下に「式て民に徳を敷かば、永く一心に有ねん」　北風　『詩経』邶風　北風に「北風は其れ涼なり、雪ふること其れ雱なり」この詩は国政が乱れ、虐刑

が横行し、人民の苦難の甚だしいことに喩えるのだとされる。なお魏の曹操「苦寒行」にも「樹木何ぞ蕭瑟　北風声正に悲し」の句が見える。　千樹　多くの樹々。李白「送別」に「梨花千樹の雪」　・霜深　六朝宋の丘靈鞠に「霜深くして高殿寒し」の句があるそうである。　爛熳「爛漫」の誤りだが六朝ごろから通行している。光りかがやくさま。王延寿「魯靈光殿賦」に「澔汧旰・流離爛漫」　長天　ひろいそら。王勃の「滕王閣序」に「落霞と孤鶩と齊く飛び　秋水は長天と共に一色」　雲盡　雲がなくなる。宋の陳樵に「雲尽きて月夜を照らす」の句があるそうである。　野鶴　野にすむ鶴。唐の王維の「送高適弟耽帰臨淮」に「野鶴終に踉蹌」

長鳴　声長く鳴く　陳子昂「詠主人壁上画鶴」に「長鳴するも誰か復た聞かん」なお『詩経』小雅　鶴鳴に「鶴九皐に鳴く、声野に聞こゆ」と見える。　松露　松におく露。王勃「傷喪録事喪子」に「蘭皆霜候早く、松露冥台に深し」　『韓詩外伝』巻七に次のような話を伝える。孔子が陳　蔡の野で暴徒に囲まれ七日も絶食した。弟子の子路がいう、「善をなす者は天これに報ずるに福をもってす」ということばがあるのに善をなすこと久しい先生がこの禍にあうのはなぜですか。孔子がいう　舜が天子となったのは堯のように聰明な主に遇ったからで　かれがもし桀紂のような暴主に仕えていたら関竜逢や比干のように殺されただろう。これは時に遇わないからだ。だから君子は学を務め身を修め行いを正して時を待つのだ。詩にもいうではないか、鶴九皐に鳴く、声天に聞こゆと。小太郎はたぶんこの話を念頭において、この詩を作っているだろう。

禍福には定まった門なしとも雲上翁のことばの通りともいうが、人間社会の得失はさらにいず

れのところにきわめられよう。家を思う二すじの涙は南にとぶ雁にそそぎ　報国の一心も北風に怨しむのだ。千万の樹々に霜ふかく秋はらんまんとかがやき、はるかな空に雲尽きて月はれいろつと澄む。この情念とこの状況を誰がいったい識ってくれよう。野の鶴は声ながく鳴く松にしとどにおく露にぬれて。

其五　　其の五

昨夜寒衾夢
吟節出澗阿
廢池孤雁起
荒徑一僧過
山瘦高松聳
風生落葉多
那邊秋望好
欲問老樵歌

昨夜寒衾の夢
吟節澗阿を出づ
廢池孤雁起ち
荒徑一僧過ぐ
山瘦せて高松聳え
風生じて落葉多し
那の辺か秋望好き
問はんと欲す老樵の歌

・寒衾　冷いしとね・唐の唐彦謙「夜蟬」に「羈人此の夕三歳の如し、衾を整えず曙鴉を待つ」
・吟節　詩を吟じつつ散歩する。節は「節」の俗字で杖のこと。唐の鄭谷「寄題詩僧秀公」に

「冷曹孤宦寥落に甘んず、多謝す節を攜へて数しば訪尋するを」の「冷曹」を「吟曹」とする本があり、その「吟」と「節」とを結んで「吟節」の話が使われるようになったらしい。潤阿溪の一隅　宋の黄庭堅「節竹頌」に「郭子我に還り、余を潤阿に扶く。……爾畏友に親しみ、予琢き予磨き、百世以て聖人を俟ちて惑わずんば則ち涪皤節竹に負かず。危くして扶けず、顛にして持たずんば則ち節竹の涪皤に負くなり」　廢池　すたれた池　杜甫「君不見簡蘇徯」に「君見ずや道辺に棄てられし池を、君見ずや前昔に摧折せられし桐を。百年の死樹も琴瑟に中る、一斛の旧水も蛟竜を蔵す。丈夫棺を蓋ひて事始めて定まる、君今幸に未だ老翁と成らず。何ぞ恨みんや憔悴して山中に在るを。深山窮谷処るべからず、霹靂と魍魎と兼た狂風と」　孤雁　ひとつ群をはなれて飛ぶ雁。魏の曹丕「雜詩」に「草虫鳴くこと何ぞ悲しき　孤雁独り南に翔ぶ」

荒徑　あれたこみち。六朝宋の顔延之「秋胡詩」に「原隰悲涼多く、廻飈高樹に卷く。離獸荒蹊に起り、驚鳥縱横に去る」また鮑照の「秋夜」に「荒徑に野鼠馳せ　空庭に山雀聚る」　一僧　唐の劉長卿「宿北山禪寺蘭若」に「上方に夕磬鳴り　林下を一僧還る」　山瘦　林になって草木が枯れ山がやせてみえること。唐の皮日休「懐鹿門縣名離合」に「山瘦せて更に秋後の桂を培て、渓澄んで間に晩来の魚を数ふ」　高松　高い松。高人にたぐえることが多い。『詩経』鄭風　山有扶蘇下「山に高松あり、沢に游竜あり。子充を見ず、乃ち狡童を見る」　風生　李白「安州般若寺水閣納涼」に「風生じて松下涼し」　落葉　劉長卿「感懐」に「秋風落葉正に悲愁むに堪へたり、黄菊残華誰を待たんと欲する」　那邊　どこ　李白「相逢行」に「万戸垂楊の裏、君の家は何那辺ぞ」　秋望　秋の眺め。杜甫「野望因過常少仙」に

「野橋斉しく馬を度し　秋望転た悠なる哉」　老樵　年をいたきこり。王維「終南山」に「人処に投じて宿らんと欲し、水を隔てて樵夫に問ふ」

昨夜の寒いしとねの夢に、詩を吟じつつ杖ついて谷間を出た。すたれた沈から孤独な宿がとびたち　荒れた径を一人の僧が過ぎていった。山は痩せて高い松が聳え　風が吹きはじめ落葉が多かった。どの辺にけけは秋の眺めがよかろうか、年老いた木こりの歌がききたいのだが。

其　六　　其の六

鞠躬宛似蟄龍蟠
此裡誰知天地寛
網密呑舟魚竊笑
履幽厳室鬼應歎
戸窓黯澹晴猶雨
風日嚴凝晝亦寒
四顧蕭條宵欲半
松聲如海度遙巒

鞠躬　宛ら似たり　蟄竜の蟠るに
此の裡　誰か知らん　天地の寛きを
網密にして　呑舟の魚は竊かに笑ひ
履傾きて　厳室の鬼は応に歎ぶなるべし
戸窓　黯澹　晴も猶ほ雨のごとく
風日　厳凝　昼も亦た寒し
四顧　蕭条　宵　半ならんと欲し
松声　海の如く　遙巒を度る

（本文第二葉裏）

・鞠躬　身をちぢめる。謹しむさま。三国の諸葛亮「後出師表」に「鞠躬尽瘁、死して後已む」

・蟄龍　かくれている竜　宋の朋九万『烏台詩案』に引く蘇軾の「詠松」に「根は九泉に到って曲処無し、世間惟だ蟄竜の知る有り」　天地寛　天地の広大なこと　岑参の「送張秘書充劉相公通汴河判官便赴江外覲省」に「前年君を見し時、君の正に泥に蟠るを見き。去年君を見し処、君の已に風にはね博つを見る。……万里江海通じ、九州天地寛し」　網密……　目のこまかすぎるあみでは雑魚がとれるだけで大きな魚はせせら笑っている。『史記』酷吏伝の序に「網は吞舟の魚を漏らして、吏治烝烝、姦に至らず」『列子』力命に「不仁の君を見、諂諛の臣を見る。臣この二者を見る、臣の独り竊かに笑ふ所為なり」　・傾……　大きな家が傾きかけると一本の支柱では支えきれず　すきをうかがっていた幽鬼たちが住みかにしようとよろこぶ。『文中子』事君に「大廈の将に顛らんとするや　一木の支ふる所に非ず」廈は厦の正字。後漢の楊雄の「解嘲」に「高明の家、鬼その室を瞰ふ」　戶窓　戶とまど。窓戶と同じ。唐の劉滄の「旅館書懐」に「落葉虫糸窓戶に満ち　秋堂に独坐して思ひ悠然」　黯澹　うすぐらい。唐の呉融の「東帰望華山」に「奈ともせず春煙籠って暗澹　堪ふべし秋雨洗いで分明」　風日　風と日。『晋書』陶潛伝に「環堵蕭然、風日を蔽はず　短褐穿結して　箪瓢屢しば空しきも晏如たり」　嚴凝きびしい。『礼記』郷飲酒義に「天地嚴凝の気、西南に始まり、西北に盛なり。これ天地の尊厳の気なり、これ天地の義気なり」　四顧　あたりを見まわす。漢の無名氏の「古詩」に「四顧何そ茫茫、東風百草を揺がす」　蕭條　さびしいさま。『楚辞』遠遊に「山は蕭条として獣無し」　松声　松風の音。宋玉の「高唐賦」に「其の底を見ず、虚しく松声を聞く」　遙巒はるかな峯。　唐の李賀の「冒谷詩」に「遙巒相圧疊し　頽緑愁ひて地に堕つ」

身をちぢめまるで蟄竜がとぐろをまいてるようだ、この獄中の天地の広さ、誰が知ろう。刑網の苛酷を吞舟の魚はひそかにせせら笑い、大廈の顚覆をのぞきこむ幽鬼どもがよろこんでいるだろう。窓べは暗澹として晴にも雨みたいで、風も日かげも厳しく凝って昼でも寒い。まわりはさびしく夜は半ばになろうとし、松のひびきは海のように遥かな峯を吹きわたる。

土窟歌

東魚西鳥相跳剔
七道干戈何時息
乾綱解紐坤軸摧
溝壑塡人亂離極」
維嶽鍾精生偉人
第二皇子最超倫
四明山上脱緇衣
旌旗飄颻旭日新」
中興偉勳誰比君
儀容粛々天下望
豈料陰雲蔽日光

土窟の歌

東魚西鳥相跳剔し
七道の干戈何の時にか息まん
乾綱紐を解き坤軸摧け
溝壑人を埋め乱離極まる」
維れ嶽の精を鍾め偉人を生む
第二皇子最も倫を超ゆ
四明山上緇衣を脱し
旌旗飄颻旭日新なり」
中興の偉勳誰か君に比べん
儀容粛粛天下の望
豈に料らんや陰雲日光を蔽ひ

檻車東去天杳々」
更無一人救急難
土窟之中極辛酸
蕙蘭杳碎北風惡
千歳之下裂心肝」
天地慘澹鬼神哭
口街匕首眼如燭
冤魂忽化為鬼雄」
來往人寰護輦轂
嗟呼鷙鳥將搏故晏如
抱懷大志須愛軀
一朝失歩萬事墮
輕落賊手計何疎
予今得罪瀕死地
常懷古人罹厄累
瑣々得失何足嗟」
憶君終夕不能寐
朔風如刀透弊衣

檻車東に去って天杳杳」
更に一人の急難を救ふ無く
土窟の中辛酸を極む
蕙蘭杳しく碎け北風悪しく
千歳の下心肝裂く」
天地慘澹鬼神哭き
口に匕首を銜み眼燭の如し
冤魂忽ち化して鬼雄と為り
人寰に來往して輦轂を護る」
嗟呼鷙鳥
大志を抱懷せば須らく躯を愛すべし
一朝歩を失ば万事堕ちん
軽がろしく賊手に落つる計
予今罪を得て死地に瀕し
何ぞ疎なる」
常に懷ふ古人の厄累に罹りしことを
瑣瑣たる得失何ぞ嗟くに足らん
君を憶ひて終夕寐る能はず」
朔風刀の如く弊衣に透る

（本文第三葉表）

飢腸倚柱作此詩
炯々太白來相照
々否君在土窟時

飢腸　柱に倚って　此の詩を作る
炯炯たる太白　来って相照す
照せしや否や　君の土窟に在す時」

・土窟歌　土牢の歌。護良親王の生涯をうたい、獄中の心事を叙べた。護良親王（一三〇八―一三三五）は後醍醐天皇の第一皇子。天皇の北条氏討伐の謀議に参画し、近畿諸大寺の僧を与党とするため嘉暦元年落飾、二年、天台座主となり、大塔の宮と称する。元弘元年　復飾、三年　天皇隠岐より帰洛すると親王を征夷大将軍とした。足利尊氏は新待賢門院と結んで親王を讒し、建武元年、天皇は親王を捕え　鎌倉に送り足利直義に預け　直義は二階堂ヶ谷東光寺の土牢（壁を塗りこめた部屋）に幽閉、二年、高時の遺子に攻められ西走するにあたって親王を殺さ、せた。なお、原詩の段落は底本のままだが、批訓では少し改め訳もこれに従った。　東魚西鳥　小太郎の造語であろうか。東西の魚も鳥も　というほどの意。「後漢書」逸民伝に「魚鳥に親しみ　村草を楽しむ」というように　魚鳥はもと権力闘争とは縁遠い平和な存在である。　跳剔　これも見なれないことばだが、跳梁懐剔というほどの意であろうか。跳梁は跳びはねる　あるいはのさばる。「荘子」逍遙遊に「子は独れ狸狌を見ざるか。身を卑くして伏し、以て敖者を候ひ、東西に跳梁して高下を避けざるに　機穽に中りて罔罟に死す」。懐剔は払い除く。「詩経」大雅、皇矣に「之を攘ひ之を剔る　其の蘩其の柘」。この第一句は、南北両朝をめぐって東西の武士や僧団がたがいに相争ったことを譬喩するのであろう。　七道　東海　東山　北陸　山陰　山

陽　南海　西海の七道、すなわち日本国中。　干戈　たてとほこ、転じて戦争。『史記』伯夷伝に「伯夷叔斉、馬を叩して諫めて曰く「父死して葬らず　爰に干戈に及ぶ、孝と謂ぶべけんや」杜甫の「自閬州領妻子却赴蜀山行」に「何れの日か兵戈尽きん」　解紐　乾綱　天子の大権。晋の范甯の「穀梁伝序」に「昔　周道衰陵して、乾綱紐を絶つ」　「絶紐」と同じ。　坤軸　地軸。杜甫の「後苦寒行」に「殺気南行して坤軸を動かす」　溝壑　みぞや谷間。『孟子』梁恵王下に「凶年饑歳には　君の民　老弱は溝壑に転じ、壮者は散じて四方にゆける者幾千人」　亂離　国が乱れ人民が離散する。『詩経』小雅　四月に「乱離して瘼めり、爰にか其れ適帰せん」　・維嶽　『詩経』大雅　崧高に「維れ嶽神を降し、甫と申とを生めり」（名嶽の神霊が降って　天子の藩屏たる甫侯と申伯を生み出した）これをうけて李商隠の「献杜僕射相公」に「人あり太極を扶け、維れ嶽元精を降す」の句がある。護良親王が天子の子として生れ天子の輔佐者となることをいう。　偉人　蘇軾の「観開西湖次呉左丞韻」に「偉人の謀議多きを求めず、事定って紛紛自ら唯阿」　第二皇子　護良親王は後醍醐の第一皇子だが、ここで「第二」というのは、地位の上からのことで　皇太子が「第一」であるのに対し　それに次ぐという意味で、こういっているのであろう。　・超倫　同類よりもはるかにすぐれる。後漢の蔡邕の「陳寔碑」に「絶世超倫」　四明山　中国天台の聖地で比叡山をこれに擬する。

緇衣　黒い衣、すなわち僧衣。脱緇衣とは還俗をさす。　旌旗　はた。『漢書』梁孝王伝に「天子の旌旗を賜ふ」　飄颻　ひるがえりあがるさま。『文選』左思「蜀都賦」に「落英飄颻」といい「注」に「飄颻は飛揚なり」　旭日　晋の傅玄の「日昇歌」に「旭日万方を照す」　中

興　一旦衰えた世が再び盛に興る運にあたること。『詩経』大雅　烝民の序に「賢に任じ能を使して周室中興す」　儀容　礼にかなったかたち。『後漢書』河間孝王開の伝に「翼の美なる儀容を奇とす」　粛々　厳正なさま。『詩経』小雅　采芑に「粛粛たる謝の功、召伯之を営む。烈烈たる征師　召伯之を成せり」　天下望　天下の人々の仰望するところ。『三国志』魏武帝紀に「今兵は義を以て動く。疑ひを持して進まずんば、天下の望みを失はん」　豈料　思いもかけず。唐の司空図の「酬張芬叔後見寄」に「豈に料らんや光の腐草の余に、生ぜんとは」　・陰雲　くらい雲　『六韜』竜韜　五音に「天清浮ならば陰雲風雨なし」　蔽日光　『漢書』五行志に「白雲起って山の如く行きて日を蔽ふ」　檻車　罪人の護送車。『漢書』爰盎伝　上淮南王を徵し之を蜀に遷す。檻車もて伝送す」　杳々　はるかなさま。『楚辞』九章　哀郢「瞭に杳杳として天に薄る」　・急難　さし迫った難儀。『詩経』小雅　常棣に「兄弟難を急にす」　「烝しくして戎くろなし」　辛酸　くるしくつらい。「文選」阮籍「詠懐詩」に「感慨して辛酸を懐き、怨毒常に多きに苦しむ」　蕙蘭　香草　『文選』古詩「傷む彼の蕙蘭の花の　英を含みて光輝を揚ぐるに　時を過して采らずんば　将に秋草に随ひて萎えんとするを」　千歳之下　はるかな年月ののち。『孟子』離婁　下に「千歳の日至も坐ながらにして致るべきなり」　心肝　心臓と肝臓。『文選』欧陽建「臨終詩」に「上は慈母の恩に負き　痛酷して心肝を摧く」　惨澹　ものすごくうすぐらい。白居易の「渭邨退居寄礼部崔侍郎翰林銭舎人詩一百韻」に「雲容陰くして惨澹　月色冷くして悠揚」　鬼神哭　死者の霊魂がなく。杜甫の「京兆杜氏墓誌」に「中外痛みて鬼神惻す」また元稹の詩に「風雨蕭条鬼神泣く」の句がある。　七首　あいくち

『戦国策』燕策に「太子預め天下の利き七首を求め……乃ち装を為め荊軻に遺る」　・寃魂　無実の罪で死んだ人のたましい。『後漢書』袁紹伝に「寃魂幽冥に痛む」　・鬼雄　幽鬼たちのかしら。『楚辞』九歌・国殤に「魂魄毅くして鬼雄と為る」　來往　王維「輞川集」に「古人時昔に非ず　今人自ら来往す」　・人寰　人間社会。『文選』鮑照の「舞鶴賦」に「帝郷の岑寂を去って　人寰の喧卑に帰る」　輦轂　天子の車。『三国志』魏　陳思王伝に「心を輦轂に馳す」

鷙鳥　猛鳥。『六韜』武韜　発啓に「鷙鳥将に撃たんとして　卑く飛び翼を斂む」小太郎の詩の「博」は撃と同じ意味で使っているともとれるし　はばたいて飛びたとうとする意にもとれる。

晏如　やすらかなさま。『文選』嵇康の「憂憤詩」に「世の与に営むなく　神気晏如」　抱懐　いだく。『文選』阮瑀の「為曹公作書与孫権」に「抱懐すること数年、未だ意を散ずるを得ず」　大志　『後漢書』馬援伝に「少くして大志を有す」　愛軀　自分の身をいとしむ。『史記』遊侠伝に「其の軀を愛せず　士の阨困に赴く」　失歩　ここでは失足の意。失足とは、立居振舞において足どりは重々しくすべきだのに　その節度を失って軽々しく進退すること。「礼記」表記に「君子は足を人に失せず」　萬事　蘇軾「過広愛寺見三学演師……」に「頭を回せば万事錯れり」　賊手　見なれぬことばだが頼山陽『日本政記』に使用する。　計何疎　『史記』范雎伝に「其の計に於て疎なり」　・得罪　忠直であるために主君から罰せられること。『詩経』小雅　雨無正に「使ふ可からずと云ふ、罪を天子に得ん」　・死地　死に場所。『孟子』梁恵王上に「罪無くして死地に就く」　厄累　見なれぬことばだが、巻きぞえをくってわざわいを得ることをいうのであろうか。　・瑣々　小さいさま。『詩経』小雅　節南山に「瑣瑣たる姻

亜　則ち膈仕せしむる無かれ」　・得失　成功と失敗。『詩経』の大序に「国史は、得失の迹を明らかにし、人倫の究を傷み、刑政の苛を哀しみ、情性を吟詠して　以て其の上を風す」　何足嗟　何足云を強めたいいかたである。『文選』楊脩の「答臨淄侯牋」に「季緒は瑣瑣、何ぞ以て云ふに足らん」　・終夕　よもすがら。『文選』任昉の「奏弾劉整」に「終夕寐ねざるに　謬って大杖を加ふ」　朔風　きたかぜ。『文選』阮籍の「詠懐詩」に「朔風厳寒を厲しくし　陰気微霜を下す」　・如刀　岑参「走馬川行」に「風頭は刀の如く面は割かるる如し」　弊衣　やぶれ衣。漢の賈誼の『新書』屈遠に「彊ひて弊衣を提荷して至る」　・飢腸　すきばら。腸は腸の俗字。韓愈「月蝕詩」に「飢腸も死に徹るまで鳴くに由なけん」　尚柱　『戦国策』斉策に「柱に倚り其の剣を弾じ歌ひて曰く、長鋏よ、帰りなんか。食に魚なし」　烱々　烱は烱の俗字。烱烱はきらきら輝くさま。蘇軾の「十月十六日記所見」に「烱烱たる初日寒うして光無し」　・太白　金星の異名。『爾雅』釈天に「明星、これを啓明と謂ふ」注に「太白星なり。晨に東方に見ゆるを啓明となし　昏に西方に見ゆるを太白となす」なお殷の旗を太白といい『戦国策』趙策に「卒に紂の頭を斬って太白に懸くる者は是れ武王の功なり」とみえる。　・相照　照らしあう。『史記』伯夷伝に「同明相照し　同類求め、雲は竜に従ひ、風は虎に従ふ。聖人作って万物覩る」

東西の魚や鳥まで跳びはねて傷つけあう、日本国中の戦いは何時になったらやむのであろう。天子の権威は衰えて地軸もくだけ　海や谷は人の死骸でうずまって乱離きわまる。

ここに名山の神霊が凝って生みなした偉人がおられる。第二位の皇子でもっとも抜群。比叡山上で僧衣を脱ぎすて、賜ったみ旗ひらひら旭日のごとく新鮮だった。

中興の偉勲は誰が君に比肩しえよう、みすがたきびきびと天下の望みであられたのだ。おもいがけなく黒雲が日光おおい　護送車は東に去った空をはるかに。

もはや一人も急難を救おうとする者はなく、土牢の中は酸鼻の極だ。蕙蘭の香もうち散って北風すごく　千歳の後に聞くにさえむらぎも裂ける。

天地慘澹鬼神哭き、口に匕首くわえられ眼は燭の火のようだ。無実の罪を負った霊たちまち幽鬼のかしらとなり、人間世界に往き来して天子のみ車まもるのだ。

ああ猛鳥は羽ばたくときにことさらにしずかだという。大志を胸にいだく者は身を大切にせねばならぬ。いったん行動をあやまれば万事がだめだ。軽く賊の手に落ちるとは何と計画の粗末なことか。

わたしは今や罪を得て死地にのぞみ、つねにおもう古人もわざわいにかかられたこと。小さな得失なげくに足らぬ、君をおもえば夜もすがらねむられぬのだ。

北風は刃のように衣に透り、空き腹かかえ柱に倚ってこの詩を作る。きらきらと太白星がやって来てわたしを照す、照しただろうか土牢に君のいましたあの時も。

無題　　無題

短景匆々荊棘林
日過亭午已成陰
江山入夢只空渉
城市有人非可尋
尚口乃窮先哲戒
修身不貳昔賢心
思量到此汗沾背
蒼外不知霜雪深

短景　匆匆たり　荊棘の林
日は亭午を過ぎて　已に陰を成す
江山　夢に入るも　只　空しく渉り
城市　人有るも　尋め可きに非ず
口を尚べば乃ち窮するは　先哲の戒
身を修めて貳はざるは　昔賢の心
思量して此に到れば　汗　背を沾す
蒼外　知らず　霜雪の深きを

無題　題によって限定しがたい複雑な感情思想をこめた詩に「無題」と題することがある。李商隠にはじまる　といわれる。李商隠の「無題」の詩には恋愛感情をうたったものが多いが、小太郎のこれらの「無題」の作にもほのかに女性の影が感ぜられなくもない。　短景　みじかい日かげ。杜甫「閑夜」に「歳暮陰陽短景を催し　天涯霜雪寒宵に奏る」　匆匆　あわただしいさま。杜甫「酬孟雲卿」に「相逢は哀哀たり難し　告別に匆匆たる莫れ」　荊棘林　いばらの林。獄中の暗喩。杜甫「哀王孫」に「已に百日を経て荊棘に竄れ　身上に完き肌膚あることなし」

亭午　正午。杜甫「寄贊上人」に「亭午頗る和暖、石田又た收むるに足る」　・江山　山河。この語によって父母などをさすことがよくある。杜甫「重贈鄭鍊」に「江山路遠し霧瀼の日　衆馬誰か感激の人と為らん」　入夢　夢の中にはいってくる。杜甫「夢李白」に「故人わが夢に

入り、我が長く相億ふを明らかにす」　空渉　歩きまわっても到達できぬ。杜甫「送大理封主簿五郎」に「風波空しく遠く渉り　琴瑟幾たびか虚しく張る」　城市　まち。杜甫「征夫」に「路衢唯だ鬼哭、城市歌を聞かず」　・非可尋　訪問できる状態ではない。杜甫「春日江村」に「茅屋還た賦するに堪へ、桃源自ら尋め可し」　尚口乃窮　『易経』の困に「言ふことあれども信ぜられず、口を尚べば乃ち窮するなり」という。困窮した者のことばを人は信ぜず、弁論によって切り抜けようとすればいよいよ窮地に陥るという戒めである。　先哲　いにしえの賢者。次の句の「昔賢」と意味のうえでは同様。唐の玄宗皇帝「太行山言志」に「凉徳先哲に慙ぢ、徽猷昔皇を慕ふ」　修身不貳　『孟子』尽心上に「殀寿貳はず、身を修めて以て之を俟つは、命を立つる所以なり」という。短命、長寿のいずれにせよ、身を修めて命終をまつのが、天命を尊重する道だ　というほどの意。　思量　思いはかる。杜甫「山寺」に「道に入るの苦を思量し、自ら哂ふ嬰孩に同じきを」　汗沾背　ひや汗で背中がぐっしょりになる。『史記』陳丞相世家に「勃また知らざるを謝し　汗出でて背を沾す」　簷外　ひさしの外。杜甫「題新津北橋楼」に「白花簷外の朶、青柳檻前の檻」　・霜雪　杜甫「赤谷」に「天寒うして霜雪繁く、遊子之く所あり」

短いひざしはそわそわとわたしを閉すイバラの林にやってくる。日が正午を過ぎるともう陰になっている。山河が夢に入りこみはするがそこをかけまわる歩みの空しさ。まちにあの人はいるのだが訪ねられる状態ではない。「弁解するので窮地におちいる」とは先哲の戒め、「身を修め

て長寿短命を気にせず」とは昔賢の心。思いめぐらしてここにいたれば冷や汗で背中がぐっしょり、ひさしの外に霜雪の深いのもおぼえなかった。

其二

池澤不自潤
豈能時灌注
燈燭不自明
安得照昏暮
天公所賦予
寧獨有餘裕
身享軒冕榮
使民歌五袴
子弟庇我蔭
史冊功名具
漆園徒荒唐
原憲我異趣
惜哉魯夫子

其の二

池沢　自ら潤はずんば
豈に能く時に灌注せんや
燈燭　自ら明かならずんば
安んぞ昏暮を照すを得ん
天公の賦予せし所
寧ぞ独に余裕あらしむるのみならん
身　軒冕の栄を享くるは
民をして五袴を歌はしめんためなり
子弟は　我を庇ふ蔭
史冊は　功名の具
漆園は徒らに荒唐
原憲も我と異趣
惜しい哉　魯の夫子

（本文第三葉表）

終年在道路　終年　道路に在り

・池澤　『周礼』地官　大司徒に「其の山林　川沢　丘陵　墳衍・原隰の名物を弁ず」といい
その注に「注ぐ瀆を川と曰ひ、水の鍾りを沢といふ」また『礼記』月令　仲春之月に「是の月や
川沢を竭すなく、陂池を潅すなく、山林を焚くなからしむ」といい、その注に「地を穿って水を
通ずるを池といふ」なお『管子』八観にも「江海広しと雖も、池沢広しと雖も　魚鼈多しと雖も、
罔罟必ず正すあり」　・灌注　水をそそぐ。『文選』班固　西都賦に「原泉灌注し、陂池交属す」

燈燭　ともしび。漢の王充の『論衡』程材に「日の幽を照すや、燈燭を須ゐず」　不自明
『法句経』上に「若し多少聞くことあるも、自大以て人に憍らば　是れ盲の燭を執って、彼を炤
すも自ら明らかならざるが如し」　天公所賦予　天の与えてくれたもの。陸游の詩に「老夫此
の七十年を享く、毎に愧づ天公の賦予の偏なるに」という句があるそうである。　餘裕　『孟
子』公孫丑下に「我に官守なし　我に言責なきなり。則ち吾が進退、豈に綽綽然として余裕あら
ざらんや」　軒冕　大夫の車と冠、高位高官をさす。　五袴　後漢の廉范が蜀郡の太守となり、良政を行ない民生が豊かになったので、人たちは「平生には襦もなかりしに、今は五袴」と
うたいはやした。　庇蔭　『左伝』文公七年にいう「昭公まさに群公子を去らんとす。桀子曰く、不可なり。公族は公室の枝葉なり。もし之を去らば、則ち本根も庇蔭する所なからん」
清の江藩の『国朝漢学師承記』銭大昕に「春秋以後、乱賊仍ほ史冊に絶えず　吾れ未だ其の能く懼るるを見ざるなり」　功名　『荀子』王制に「功名を立てんと欲せば、賢を尚とび能を使ふ

に若くはなし」　・漆園　戦国時代の思想家で『荘子』の著者といわれる荘周。蒙の人でその地の漆の栽培の係りの役人だったことがあるといわれる。楚の威王から宰相にしようと招待されたが権力者に拘束されるより自由でいるほうがよいといって仕えなかった。『史記』列伝では、かれの「畏累虚　亢桑子の篇はみな空語にして事実なし」という。小太郎が「荒唐」と評する所以であろう。　・荒唐　とりとめがない。韓愈「送孟郊序」に「荘周は其の荒唐の辞を以て鳴る」・原憲　孔子の弟子。師の歿後、草深いいなかにかくれた。相弟子の子貢が衛の宰相となり車馬を飾って訪うた。憲はボロ衣冠をととのえて会った。子貢は軽んじて「あなたは病か」ときいた。憲「わたしは人貧なきものを貧といい、道を学んでも実行できぬものを病という」と聞いている。わたしは貧だが、病ではない」子貢は慙じて去り終身その失言をくやんだ。　異趣　行く道を異にする。陸游「送施武子」に「只だ道の升沈は方に異趣なるも、豈知らんや気類の肯て相求むるを」　小太郎は原憲の隠居を自分の生きかたとしては取れぬといっているのであろう。　魯夫子　孔子をさす。　道路　赤路というほどの意で使っているのであろう。『礼記』檀弓上に「今丘や東西南北人なり」というが　孔子はその一生　居処が一定せぬことが多かった、おのれの志を達成すべき場所を求める旅をつづけて。

池が自身ぬれていなくて　どうして農時に田に注ぐことができよう。燈火が自身あかるくなくて、なぜ暗い夜を照せよう。天帝が与えられたものは、無責任な自由を楽しませるためだったろうか。高位高官の栄を身に受けたのは　民に豊かな生活をさせるため。子弟は君主を護る枝葉、

史書は功名を記す道具。荘子の思想は広漠としてとりとめなく、原憲の出処けいさぎよくともわたしの行きかたとはちがう。愛悟すべきは孔子の道、だがその人は年中旅路をさまよった。

其三　　其の三

窮達自有命　　窮達　自から命あり
人生如隙駒　　人生　隙駒の如し
安束千里足　　安んぞ千里の足を束ねて
臨岐空躑躅　　岐に臨み空しく躑躅せんや
及時不成事　　時に及んで　事を成さずんば
霜雪忽滿鬢　　霜雪　忽ち鬢に滿ちん
文章雖小技　　文章は小技と雖も
吾道存詩書　　吾が道　詩書に存せり
立言至不朽　　言を立て　不朽に至る
自是大丈夫　　自から是れ大丈夫
沒世名不稱　　世を沒するまで名の稱せられざるは
孔聖亦疾諸　　孔聖も亦　諸を疾めり

窮達自有命　困窮するか栄達するかはもと天命によるもので人力では左右できぬ。「文選」班彪「王命論」に「窮達命あり、吉凶人に由る」　人生如隙駒　天地の間に生きる人の命のすみやかさは疾走する馬をすきまからちらっと見るようなもの。「隙」は隙の俗字。『荘子』知北遊に「人の天地の間に生けるは白駒の郤（隙）を過ぐるが若し。忽然たるのみ」　千里足　一日千里を走る足　後才にたとえる。『韓詩外伝』七に「驥をして伯楽を得ざらしめば　安んぞ千里の足を得ん」　・臨岐　道の分れ目に立つ。『淮南子』説林訓に「楊子逵（岐）路を見て之に哭す。其の南すべく以て北すべきが為なり」　躊躇　たたずむ。「躕」は躊の俗字。『後漢書』陳長統伝に「畦死に躊躇す」　及時　なすべき時に。『易経』文言に「君子は徳を進め業を修め時に及ばんと欲するなり」　・文章雖小技　文章は高い道徳にくらべると小さな技術にすぎないが。杜甫「贈華陽柳少府」に「文章は一小伎、道に於て未だ尊しと為さず」　・吾道　『論語』里仁に「吾が道は一以て之を貫く」また杜甫「屏跡」に「用拙に吾が道を存し、幽居物情に近し」　詩書　『詩経』と『書経』を指し聖人の教えというほどの意。『論語』述而に「子の雅言する所は詩、書、執礼　皆な雅言するなり」　立言垂不朽　世のいましめとなる言葉を残し、それがいつまでも記憶される。『左伝』襄二十四年に「春　穆叔　晋にゆく。范宣子これを逆ふ。問ひて曰く「古人言へるあり曰く、死して朽ちず、と。何の謂ぞや。穆叔未だ対へず。宣子曰く「昔　匄の祖　虞より以上を陶唐氏と為し　夏に在りては御龍氏と為し　商に在りては豕韋氏と為し　周に在りては唐杜氏と為す。晋　夏盟を主り范氏と為す。其れ是を之れ謂ふか」と。穆叔曰く「豹の聞く所を以てすれば　此を之れ世禄と謂ふ。朽ちざるに非るなり。魯に先大夫あり。

論

臧文仲と曰ふ。既に沒せり。其の言世に立てり。其れ是をこれ謂ふか。豹、之を聞く、大上は德を立つるあり、其の次は功を立つるあり、其の次は言を立つるあり、久しと雖も廢せず、と。此をこれ不朽と謂ふ。若し夫れ姓を保ち氏を受けて以て宗祀を守り　世〻祀を絶たざるは国として之なきはなし。祿の大なる者なり。不朽と謂ふべからず」と。　沒世名不稱　『論語』子罕に「四十五十にして聞こゆること無くんば、斯れ亦た畏るるに足らざるのみ」

困窮と栄達はおのずからさだめがあり、人生は隙間から見た駒より早く過ぎ去る。駿足をつながれたとてどうして、分れ道でむなしくためらっていることがあろうか。なすべき時に事をなさわば、霜がたちまち鬢に満ちよう。文章は小さな技術とはいえ　わが道は詩歌文章のうちにも保存し得るのだ。発言してそれが後世に不朽ならば、これまた大丈夫の事業であろう。死ぬまで名声の間こえめことを、聖人孔子もいとわれたのだ。

其四　　其の四

儒冠身累誤　儒冠　身　累しば　誤り
荆棘命才存　荆棘　命　才に　存す
雪片深埋路　雪片　深く　路を　埋め
晨聲潛在門　晨声　潛に　門に　在り

味分飴蜜滑　味は飴蜜を分って滑かに
情滿肺腸温　情は肺腸に滿ちて温かなり
言語無由接　言語　接するに由なし
乎作詩聊謝恩　詩を作って　聊か恩に謝す

儒冠身誤　学者であることが出世をさまたげる。儒冠は儒者の冠。杜甫「奉贈韋左丞二十二韻」に「紈袴は餓死せず　儒冠は多く身を誤る」　荆棘　「無題」其一（五九頁）を見よ。

雪片　杜甫「寄楊五桂州譚……」に「梅花万里の外　雪片一冬深し」　屐声　げたの音。『世説新語』容止に「函道中に屐声の甚だ厲しきあるを聞く」　飴蜜　あめとはちみつ。『礼記』内則に「棗栗飴蜜以て之を甘くす」　肺腸　こころ。「腸」は腸の俗字。『詩経』大雅　桑柔に「自ら肺腸ありて　民をして卒く狂せしむ」また宋の司馬光の「独楽園記」に「耳目肺腸奄ち己が有となる」　言語　『易経』頤に「君子は以て言語を慎む」　作詩　『詩経』小雅　巷伯の序に「巷伯は幽王を刺るなり。寺人讒を傷む。故に是の詩を作るなり」　謝恩　『漢書』張禹伝に「禹、頓首謝恩し誠を帰す」

儒者としての道徳教養が出世をさまたげ、いばらのような獄中にかろうじて命ながらえる。雪が深く埋めた路を　下駄の音がそっと門のあたりにした。おわかちくださった飴の味わいのなめらかに、心いっぱいに沁みとおるお情けのあたたかなこと。ことばをおかけする由なく、詩を作

っていさ、かご恩に感謝する。

（本文第四章表）

其　五　　其の五

稜月凄風滿地霜　　稜月　凄風　地に滿つる霜
山光水色共荒涼　　山光　水色　共に荒涼
寒威凛々今如此　　寒威　凛凛　今　此の如し
獨有梅花暗放香　　獨り　梅花の　暗に香りを放つ有り

・稜月　見なれない語だが、鋭く尖った月、というほどの意であろう。『文選』鮑照の「蕪城賦」に「稜稜たる霜気　蔌蔌たる風威」とあり、李善の注に「稜稜は霜気厳冬の貌」という。　凄風　すさまじい風。陸機の「歳暮賦」に「凄風愴として其れ条を鳴らし、落葉翻として林に灑ぐ」

滿地　杜甫「秋興」に「関塞極天惟だ鳥道、江湖滿地一漁翁」　・山光　白居易「菩提寺上方晩眺」に「楼閣高低樹淺深、山光水色暝くして沈沈」　・荒涼　あれはててすさまじいさま。『文選』孔稚圭「北山移文」に「鵠石猨絶して与に帰るなく　石逕荒涼として徒らに延佇す」

寒威　はげしい寒さ。唐の方干の「歳晩言事寄郷中親友」に「寒威は半ば入る竜蛇の窟、暖気は全く帰す草樹の根」　凛凛　寒さの身にしみるさま。「古詩」に「凛凛として歳云に暮れ、蜉蝣夕に鳴悲す」　暗放香　宋の林逋「山園小梅」に「疎影横斜水清浅　暗香浮動月黄昏」

するどい月　すさまじい風、地に満ちた霜、山の光も水の色もともに荒涼としている。敬寒の猛威はいまやこのようだが　ただひとつ梅の花だけがほのかに香りを放っている。

其六

人生窮達不須嗟
到處優游皆我家
地似壺天無暦日
夢遍山水醉烟霞
放歌謾語任神聽
飽食閑眠忘世譁
塵慮近來消遣盡
夕陽孤坐數歸鴉

其の六

人生の窮達　嗟するを須ゐず
到る処　優游　皆　我が家
地は壺天に似て暦日なく
夢に山水を遍ひて煙霞に酔ふ
放歌　謾語　神の聴くに任せ
飽食　閑眠　世の譁しきを忘る
塵慮　近来　消遣し尽し
夕陽に孤坐して帰鴉を数ふ

・人生窮達　其三（六五ページ）を見よ。　優游　ゆったりと自得するさま。『後漢書』仲長統伝に「統は性倨傲、敢て直言して小節を矜らず語默常なし。時人あるひは之を狂生と謂ふ。州郡の命召する毎に輒ち疾と称して就かず。常に以為へらく　凡そ帝王と遊ぶ者は身を立て名を揚げんと欲するのみ。名は常には存せず、人生は滅び易し。優游偃仰して以て自ら娯むべし、と。

・壺天　別天地・壺中天・壺中天地と同じ。「後漢書」費長房伝に見える壺公という仙人が壺を住処とした故事による。ここでは獄中を壺中の天といっている。元稹の「幽棲」に「壺中の天地乾坤の外、夢裏の身名旦暮の間」　・無暦日　世間で通用している季節がない。何月何日かもわからぬ。「唐詩選」太上隠者の「答人」に「山中暦日無し、寒尽きて年を知らず」　・烟霞　山中の風景。梁の江淹の「雜詞序」に「罪を待つこと三載　烟霞の状を究識す」　・放歌　声をはりあげて歌う。杜甫「自京赴奉先県詠懐五百字」に「沈飲聊か自ら遣り、放歌頗る愁絶」また「聞官軍收河南河北」に「白日放歌須く酒を縱にすべし、青春を伴と作し好し郷に帰らん」　・誤語　とりとめのないことば。「荘子」天道に「（孔子）十二経を繙きて以て説く。老聃その説の中ばにして曰く、大だ誤なり（ばなは）。願はくはその要を聞かんと。孔子曰く　要は仁義に在りと」　神聴　神が聞く。晉の傅玄の「天郊饗神歌」に「八音諧ひ、神是れ聴く」　飽食　「論語」陽貨に「飽食終日、心を用うる所なし、難い哉」これに対し「荘子」列禦寇に「巧者は労し知者は憂ふ。能なき者は求むる所なく飽食して遨遊す」同じ無題詩の中でも其の三と、この其の六では、その志向が反対である。これを反語　激語とみるか思想の推移とみるか。　閑眠　のんびり眠る。明の高啓の「雨中曉臥」に「閑人は晴日も猶ほ事無し、風雨の今朝合に眠るべし」　世諱　世間のさわぎ。　塵慮　わずらわしい思い。唐の顔真卿「夜集聯句」に「茲のタベ塵慮なく、高雲片心と共なり」　消遣　消失する。宋の王禹偁の「竹楼記」に「焚香默坐し、世慮を消遣す」

夕陽　杜甫「晩晴」に「夕陽細草に薫じ、江色疎簾に映ず」　・孤坐　ひとり坐る。唐の馬戴の「雪後寄白閣僧」に「久しく披て山納壞ち、孤坐して石牀寒し」　歸鴉　ねぐらに帰るから

す。杜甫「呀鶻行」に「清秋落日に已に身を側め　過雁帰鴉鎖ごも回首す」

人生の困窮と栄達は嘆くに足らぬ　どこでもゆったりできればみな我が家だ。この地は壺中の天に似て暮日なく、夢に山水を追えばその美景に酔いうるのだ。声を放ってうたう歌とりとめのなはわがことば神よお気にめしたう聞きたまえ、飽くまで食らいのんびり眠って世の騒ぎ忘れ、わずらわしい思いは近ごろすっかりなくなって　夕陽にむかい孤り坐り寝ぐらに帰る鳥かぞえる。

其七　　其の七

蘇秦事鬼谷　　蘇秦　鬼谷に事へ
西去干秦王　　西に去き、秦王に干む
十説終不遇　　十たび説き、終に遇はず
敝衣歸故鄉　　敝衣にて　故郷に帰る
父母不共言　　父母　共に言はず
妻嫂不下堂　　妻嫂　堂を下らず
發憤成揣摩　　発憤　揣摩を成し
遂帯卿相章　　遂に帯ぶ　卿相の章
從傍盈道路　　従傍　道路に盈ち

（本文第四葉裏）

車馬耀煌々
可憐齊郭門
富貴豈可常
所以嚴子陵
桐江釣風涼

車馬　耀いて煌煌
憐れむべし　齊の郭門
富貴　豈に常なるべけん
所以に　嚴子陵
桐江　風涼に釣せり

蘇秦　戦国時代の遊説家。秦以外の六国同盟を説き、六国の大臣を兼任したが、のちに後輩の張儀の主張に敗れ、暗殺された。その伝は『史記』にあり『戦国策』にも関連記事があり、小太郎はそれらを要約してこの詩を作った。・鬼谷　『史記』に「蘇秦は東周雒陽の人なり。東して師に事へ、斉に於て之を鬼谷先生に習ふ」といい注に「鬼谷先生は六国時の従横家」という。当時の国際政治に関する論説家。　・西去……　『戦国策』に「秦王に説く。書十たび上つりて説行はれず、黒貂の裘敝れ、黄金百斤尽き、資用乏絶し、秦を去りて帰る。……家に至るに、妻は紝より下らず、嫂は為に炊がず、父母与に言はず」第四句の「敝裘」は「敝衣」の誤り。　発憤心をふるいおこす。『論語』述而に「憤を発し食を忘る」蘇秦発憤の状を『戦国策』は次のように描く「蘇秦喟然として嘆じて曰く、妻は我を以て夫となさず、嫂は我を以て叔となさず、父母は我を以て子となさず。是れ秦の罪なりと。乃ち夜に書を発き、箧数十を陳ね、太公陰符の謀を得たり。伏して之を誦し簡練もって揣摩をなす。書を読み睡らんと欲すれば錐を引き自ら其の股を刺す。血流れて足に至る。曰く、安くに人主に説きて其の金玉錦繡を出だし卿相の尊を取る能

はざる者あらんやと。期年にして揣摩成る。「揣摩」とは研究し応用能力を深めること。　遂帯卿相章　『戦国策』に、蘇秦が趙王に説くと「趙王大いに説ぶ。封じて武安君となす。相印を受く。車百乗、錦繡百純、白璧百雙、黄金万鎰、以て其の後に随ふ」　煌煌　ぎらぎらとまばゆいさま。『詩経』大雅　大明に「檀車煌煌」　斉郭門　斉の大夫で蘇秦と君寵を争う者が刺客に蘇秦を刺させた。絶命に至らず賊は逃げた。蘇秦は斉王に言った、わたしが死んだら　わたしを車裂きの刑に処し　市上で見せしめにし、蘇秦は燕のために斉で乱を為した、といえば、わたしを刺しだ賊を捕えることができるでしょう。斉王は言われた通りにして刺客を捕えた。こんな話を『史記』が伝える。自ら言ったこととはいえ、蘇秦は斉の郭門で車裂の刑に処せられたことになる。「古詩」に「郭門を出でて直だ見よ、但だ見る丘と墳と」　嚴子陵　後漢の嚴光のこと　子陵はその字。『後漢書』逸民伝に「会稽餘姚の人なり。少にして高名あり。光武と同じく遊学す。光武即位するに及び、乃ち名姓を変じ身を隠して見れず。乃ち富春山に耕す。後人其の釣処に名づけて嚴陵瀬となす」注に「桐廬県南に嚴子陵の漁釣処あり」桐江はすなわち嚴陵瀬を含む桐廬県境の川。

蘇秦は鬼谷先生に学び、西にゆき秦王に仕えようとした。十たび説いたが終に容れられず　ぼろをまとって故郷に帰った。父母は話しかけてくれず、妻も嫂も座敷から下りて迎えなかった。発憤して兵法を研究し、かくて六国の大臣のしるしを帯びた。従僕は道路にあふれ、車馬は輝いてきらきらしかった。だが憐れ斉の都門にその死体はさらされた。富貴がどうして永続しよう。

だから聖明丸嚴子陵ハ、桐江で涼風にふかれて釣りをしたのだ。

十二月十四日夕感　赤穂遺臣事因賦

十二月十四日夕べ赤穂遺臣の事に感じ因って賦す

朔風吹雪々霏々
囹圄暮色轉凄其
正是抄冬旬有四
赤穂遺臣斬仇時」
吁嗟錆節盤根知利器
英雄成事豈容易
三年經營籌策密
誰道優遊待時至」
半夜冒雪督同盟
號令嚴肅寂無聲
一鎚應聲排門闥
寒月光底斬巨鯨」
誰知白雪朱門曉

朔風　雪を吹き　雪霏霏
囹圄　暮色　転た　凄其
正に是れ　抄冬　旬有四
赤穂の遺臣　仇を斬りし時
吁嗟　錆節盤根　利器を知る
英雄　事を成す　豈に容易ならんや
三年の経営　籌策　密なり
誰か道ふ　優遊　時の至るを待つと
半夜　雪を犯して同盟を督し
号令　厳粛　寂として声無し
一鎚　声に応じて　門闥を排し
寒月光底　巨鯨を斬る
誰か知らん　白雪朱門の暁

即是落花紛々洛陽道」
指揮隊伍如弄丸
何異平安市楼舞盤桓」
號令約束如畫一
已定花柳街頭酣歌日」
古来人生有窮通
終始一節是英雄
倏忽星霜二百歳
落花啼鳥墓門風
精霊千古溢苔碣
兒女語之亦嗚咽
吁我狂妄百無能
空得罪戾在縲絏」
感君忠貞淚潸然
為作新詩吊英魂
安知他年人吊我
又生感慨似當年

即ち是れ　落花紛紛たる洛陽の道なることを
隊伍を指揮して　丸を弄するが如し
何ぞ異らん　平安市楼に舞ひて盤桓たるに
号令　約束　画一の如きも
已に定まれり　花柳街頭に酣歌せし日に
人生　窮通あり
終始　節を一にする　是れ英雄
星霜　二百歳
落花　啼鳥　墓門の風
千古　苔碣に溢る
亦　嗚咽す
我　狂妄　百　能なく
縲絏に在り
君が忠貞に感じて　涙　潸然
為に新詩を作って英魂を弔す
安んぞ知らん　他年　人の我を弔し
又　感慨を生じて当年の似きを

（本文第五葉表）

・霏々　雪の甚しく降るさま。『詩経』小雅・采薇に「今我れ来る、雪雨ること霏霏たり」・囹圄　牢獄。「淮南子」説山訓に「囹圄に拘せらるる者は、日を以て瞻しとなす」　凄其　寒くてさびしい。『詩経』邶風・緑衣に「絺や綌や、凄其として以て風ふく」・杪冬　「杪」は杪の誤り。冬の末。唐の崔曙の「早発交崖山還太室作」に杪冬正に三五、日月遥かに相望む」

錯節盤根　いりくんだ木のふしともつれあった根、転じて困難な事件。「後漢書」虞詡伝に「臣の職や、盤根錯節に遇はずんば、何を以てか利器を知らん」　経営　はかりいとなむ。『詩経』小雅・北山に「旅力方に剛として、四方を経営せしむ」　籌策　はかりごと。「史記」高祖紀に「籌策を帷帳の中に運らし、勝を千里の外に決す」　同盟　ともに誓う。「孟子」告子下に「凡そ我が同盟の人、既に盟へるの後は好に帰せよ」　號令　大声で命令する。『礼記』月令に「号令を申厳にす」・嚴粛　きびしい。『南史』宋武帝紀に「軍令厳粛」　門闥　大門小門。『文選』班固「西都賦」に「門闥洞開」　寒月　冬の月。李白「望月有懐」に「寒月清波に揺れ、流光宮戸に入る」・巨鯨　呑舟の魚。英雄。・朱門　大官の邸宅。杜甫「詠懐」に「朱門に酒肉臭く、路に凍死の骨あり」　弄丸　玉とり。『荘子』徐無鬼に「市南宜僚は丸を弄して両家の難解く」・盤桓　さまよう。『文選』班固「幽通賦」に「竚ちて盤桓して且つ俟つ」

約束　統率。『史記』司馬穰苴伝に「軍に臨み約束すれば則ち其の親を忘る」・畫一　整斉。『史記』曹相国世家に「蕭何の法を為す、顛として画一の若し」　酣歌　酒を飲み歌をうたいたのしむ。『書経』伊訓に「恒に宮に舞ひ、室に酣歌す」・一節　一貫した節操。『晏子』不合経術者に「孔子は行ひて一節なる者なり」　倏忽　たちまち。「倏」は倏の俗字。「幽通賦」

に「長は倏忽として其れ再びせず」　墓門　墓道の門。『詩経』陳風　墓門に「墓門棘あり、斧以て之を斯く」　・星霜　歳月。柳宗元「代柳公綽謝上任表」に「星霜屢しば移る」　・精霊　神仙　また霊魂　『文選』左思「呉都賦」に「精霊その山阿に留まる」　狂妄　きちがいじみる。蘇軾「為兄軾下獄上書」に「惟だその狂妄に寛に、特に乞ふ所を許されよ」　・罪戾　つみ　『左氏伝』荘公二十二年に「罪戾を免じ負担を弛うするは　君の恵みなり」　縲絏　罪人をつなぐ黒い縄。牢獄。『論語』公冶長に「縲絏の中に在りと雖し其の罪に非るなり」　潸然　潸然の誤。さめざめと涙を流すさま。『荀子』宥坐に「詩に曰く、眷焉として之を顧み　潸然として涕を出だすと。豈に哀しからずや」

北風は雪を吹き雪はしんしんと降り　牢獄の暮色はいよいよさびしい。正に冬の末の十四日赤穂の遺臣が仇を斬った時だ。ああ苦難の事態がすぐれた器量をあらわすとはいえ、英雄の事業を成し遂げることたやすかろうや。三年間のその準備計画は周密だった、誰に言えようのんびりと時の来るのを待っていたなど。夜半雪を冒して同志をはげまし、号令は厳粛でひっそりと声たてず、大槌のひびきと共に門おしひらき　寒さむとした月光のもと巨鯨を斬った。誰がかわて知っていたろう白雪朱門の暁が、落花ひらひら舞いおちた洛陽の道のはてにあろうと。手玉とるようあざやかな隊伍の指揮は、京のやかたでしずしずと舞うた手ぶりとなにことなろう。号令統卒のとどのいは、きまっていたのだ既にあのくるわで飲んで歌っていた日に。古来人生に失敗成功はつきものだが、終始節操をかえぬのが英雄なのだ。たちまち二百年がすぎさって、花散り鳥なき

墓場の門に風がふく。精霊千古こけむした墓碑にあふれて、女子供もこれを語ればすすりなく。ああおれは狂妄の書生百事に能なく、むなしく罪され牢獄につながれている。君たちの忠貞に感動し涙しとどに、新しく詩を作り英魂を弔うのだ。いつの日にかけたして人がおれを弔い、またいまのおれに似た感慨をいだくだろうか。

新秋夜雨　新秋夜雨

夜雨爽然秋暗生
果瓜楼上燭空明
天河一水無由渡
何況人間萬里程

夜雨　爽然　秋暗　生ず
果瓜楼上　燭　空しく明るし
天河　一水　渡るに由なし
何に況んや　人間　万里の程

新秋　北周の庾信の「詠懐」に「残月は初月の如く、新秋は旧秋に似たり」　夜雨　王維の「魚山神女祠歌」に「風凄凄として夜雨ふる」　・爽然　李白「遊秋浦白笴陂」に「白笴に夜長嘯すれば、爽然として渓谷寒し」とうたうように「さわやかなさま」をあらわす語だが、ここでは『史記』屈原賈生伝贊」に「服鳥賦を読むに死生を同じくし去就を軽んず。また爽然自失す」という「茫然たるさま」をあらわす方向をも含むだろう。　・秋暗　元稹の「解秋」に「翳翳たり林上の葉、知らず秋暗の生ずるを」　・果瓜　まくわうり。「果瓜楼」とはたぶん、まくわう

りの蔓がはいのぼっている二階屋という意であろう。

夜の雨さっとふりすぎ秋めいた暗さが生じ、まくわうりのつるのびた二階のへやにともしびの空しい明かるさ。天の河のひとすじを渡るすべなく　まして人間世界の万里のみちすじは　。

秋夕書事　秋夕事を書す

殺氣森〻向夕横
秋光還是入愁城
風吹萬葉飛將盡
月在九天寒愈明
孤憤相依千古士
一官空過十年生
通宵不睡成何事
只聽殘蛩草際生

殺気　森森　夕べに向って横り
秋光　還た是れ　愁城に入る
風は万葉を吹いて　飛びて将に尽きんとし
月は九天に在って　寒くして愈いよ明かなり
孤憤　相依る　千古の士
一官　空しく過ぐ　十年の生
通宵　睡らず　何事をか成す
只だ聽く　殘蛩　草際の声

（本文第五葉裏）

秋夕　秋の夜。「文選」謝靈運「道路憶山中」に「秋夕の長きを怨みず、恆に夏日の短きに苦しむ」　書事　ことをしるす。事の内容はあらわにしがたいのでただ事といっているのだ。

殺氣　寒冷を催す気。「礼記」月令に「中秋の月、殺気浸盛」また殺伐の気。杜甫「西山」に、「西南和好に背き、殺気日びに相縈ふ」　森々　盛んなさま。韓愈「月蝕詩」に「森森として万木夜僵立し、寒気冥冥として頑に風なし」　向夕　夜に。「向」は於と行ぼ同義。唐の王昌齢の「従軍行」に「夕に向って大荒に臨めば、朔風帰意を動かす」　・横　横溢というほどの意。・秋光　秋色。唐の李渉の「秋日過員太祝林園」に「秋光何れの処か日を消すに堪ふる　玄晏先生酒架の書」　・愁城　愁の境地。宋の范成大に「想得す秋田来歳好きを　瓦盆醸を加えて愁城に灌ぐ」という詩があるそうである。　・萬葉　多くの木の葉。宋の邵雍の「高竹」に「時時微風来り、万葉同一声」　・九天　天の最高処。魏の曹植の「遊仙」に「九天の上に翱翔し　轡を駟せて遠く行遊す」　孤憤　ひとり忠をつくして世に容れられぬいきどおり。「史記」韓非伝に「往者得失の変を観じ孤憤：十余万言を作る」注に「孤憤とは孤直の時に容れられざるを憤るなり」陸機の「弁亡論」に「忠臣孤憤、烈士節に死す」　通宵　夜どおし。宵は宵の意で用いている。唐の李頻「湘中送友人」に「風波尽日山に依って転じ、星漢通宵水に向って連る」　殘留　のこってとどまること。宋の張耒の詩に「残留白日を弔ひ、寒鳥空枝に悲しむ」の句がある。そうである。

殺気はしんしんと夜にみちあふれ、秋光はまたもや愁いの城にはいってくる。風は万木の葉を吹き飛んで尽きようとし、月は九天に昇って寒ざむといよいよ明るい。孤憤をともにいだくゆえ千年を距てた人もなつかしく　一つの官職にわが十年の生命は空しく過ぎた。夜っぴて眠らずい

ったい何をしていたか、ただ草むらに消え残ったこおろぎの声を聴いていただけ。

二　　二

秋月荒々白
寒砧續々聽
佳期多易負
好景奈難停
感慨空欽古
才名最惜齡
苦吟長獨坐
霜落滿空庭

秋月荒荒として白く
寒砧続続として聽こゆ
佳期多く負き易く
好景那んぞ停め難きや
感慨空しく古を欽び
才名最も齡を惜しむ
苦吟して長く独坐するに
霜落ちて空庭に満てり

、秋月　杜甫「十七夜対月」に「秋月乃ち円き夜、江邨に独り老ゆる身」　荒々　暗淡たるさま。杜甫「漫成」に「野日荒荒として白く、春流泯泯として清し」　・寒砧　さびしいきぬた。杜甫「客旧館」に「風幔何れの時にか巻く、寒砧昨夜の声」　・續々　引きつづくさま。白居易「琵琶行」に「眉を低れ手に信せて続続に弾じ、説尽す心中無限の事」　佳期　よい時節。杜甫「大雲寺贊公房」に「艱難世事迫る、隠遁は佳期の後」　・好景　よいけしき。杜甫「雨晴」

に「今朝好晴景、久雨農を妨げず」また蘇軾の「贈劉景文」に「一年の好景君須く記すべし、正に是れ橙黄橘緑の時」　・感慨　感じいきどおる。阮籍「詠懐詩」に「感慨辛酸を懐き　怨毒常に多きに苦しむ」　欽古　古人を欽慕するというほどの意であろう。後漢の蔡邕の「太丘廟碑」に「欽慕は人に在り、旧く害章あり」杜甫「風疾舟中伏枕書懐」に「狂走して終に奚くにか適く　微才欽ぶ所に謝す」　・才名　才能があるという名声。杜甫「戯簡鄭広文」に「才名四十年、坐客寒く戯なし」　惜齢　見なれぬことばで難解だが　『呂覽』長利に「我は国士なり、天下の為に死を惜しむ」という「惜死」に近いだろうか。それならば　まだ若い年齢でその生涯を終えることを愛惜する。　・苦吟　苦心して詩作する。唐の杜牧の「寄張祜」に「仲蔚知らんと欲す　何処にか在る、林下に苦吟して詩塵を払ふ」　独坐　ひとり坐る。王維「秋夜独坐」に「独坐双鬢を悲しむ、空堂二更ならんと欲す」　霜落　霜が降る。唐の王昌齢の「太湖秋夕」に「水宿烟雨寒く　洞庭霜落微なり」　空庭　人けのない庭。「老樹空庭に得、清渠一邑に伝ふ。

秋の月はすずろに白く　寒い砧の響きがつぎつぎに聞こえてくる。佳い季節はままならぬことが多く、好い光景はどうして停めがたいのだろう。感慨して空しく古人を慕い、才名をいだいて齢を終えることが最も愛惜される。苦吟してひさしく独坐していたら、霜がおりて人けない庭にいっぱいだった。

秋懐　　秋の懐ひ（あき おも）

沿道警報久紛紜
先見誰人能絶群
一点寒燈千里夢
秋風去拜子平墳

沿道の警報　久しく紛紜
先見　誰人か　能く絶群
一点の寒燈　千里の夢
秋風に去いて拝す　子平の墳

沿道　海道に沿って、というほどの意であろう。　紛紜　乱れるさま。袁宏の「三国名臣序賛」に「六合紛紜」　先見　未来を予知する。『後漢書』揚彪伝に「日磾が先見の明なきを愧ぶ」　絶群　衆にすぐれる。『後漢書』隗囂伝に「驥尾に託して以て絶群なるを得」　寒燈　さむざむとしたともしび。唐の高適の「除夜作」に「旅館の寒燈に独り眠らず、客心何事ぞ転た悵然」　子平　林子平のことであろう。江戸の人。西洋人について海外の事情を問い、辺防の急をさとり、『海国兵談』等を著す。寛政四年、幕府はその版木を毀ち　その兄の家に禁錮する。数年のち病を得て死んだ。

海道に沿って警報の乱れ飛ぶこと久しかった。先見の明において誰が群を抜き得たろう。一粒の寒ざむとした燈火に千里を夢み　秋風に吹かれ林子平の墓を拝みにゆこうと思う。

齋藤拙堂の評。悲壮。

對月　月に対す

（本文第六葉表）

秋月沉々白　秋月沈沈として白く
陰蟲切々鳴　陰虫切切として鳴く
是時孤客淚　是の時孤客の涙
不獨故園情　独り故園の情のみにあらず

・沉々　奥深くしずかなさま。「沉」は沈の俗字。唐の張若虛の「春江花月夜」に「斜月沉沉藏海霧　碣石瀟湘無限路」　：陰蟲　秋の虫。唐の韋応物の「秋夜」に「庭樹転た蕭蕭、陰虫還た戚戚」　切々　声の細く続くさま。白居易「琵琶行」に「大弦嘈嘈如急雨小弦切切如私語」

孤客　孤独な旅人。唐の劉禹錫「秋風引」に「朝来庭樹に入る、孤客最先に聞く」　故園　ふるさと。妻や恋人をこの語でさすのが唐以来のならわしである。杜甫「秋興」に「叢菊両開他日の涙、孤舟一繫故園の心」

秋の月しみじみ白く　物かげの虫せつせつと鳴く。このときのわれの涙は、ふるさと思ふのみにはあらず。

春日送人　春日人を送る

送君垂柳浦
一唱小秦王
今日聊同醉
明朝各隔鄉
海氛方肅殺
天變累災祥
志士懷溝壑
別離何足傷

君を送る　垂柳浦
一たび唱ふ　小秦王
今日　聊が醉ひを同じくし
明朝　各おの郷を隔てん
海氛　方に肅殺
天変　累に災祥
志士　溝壑を懷ふ
別離　何ぞ傷むに足らん

垂柳浦　しだれやなぎのあるみなと。「垂」は垂の俗字。梁元帝「折楊柳」に「巫山巫峽長し、垂柳復た垂楊」人を送るとき柳の枝を結んで平安を祈る風習があった。　小秦王　唐の太宗をさすが　太宗のはじめたといわれる歌舞に「破陣楽」があり　そこから出たとおもわれる歌詞名（詞牌という）に「小秦王」がありました丘家筝　陽関曲ともいうそうである。七言絶句と同じ形式である。陽関曲は送別の宴にうたわれることが多いから、ここでの「小秦王」とは送別の歌の意で　またその別名の「秦王小破陣楽」にちなんで武事の成功を祈る意をこめたのであろう。

・海氛　海辺の気。元の柳貫の「送楊君祥赴定海」に「山翠氣に入って宿酒を消し、海氛雨を吹いて秋衣に落つ」なお『六部成語』海氛未靖の注解に「海邊の賊寇未だ安靖ならず」というから蔡末の海寇をこの語に含めているのであろう。　・肅殺　秋気が草木を枯殺する。唐の陳子昂「別

崔著作東征」に「金天方に肅殺　白露始めて專征」　・天変　天文にあらわれる変事、『漢書劉向伝』に「天変上に見はれ、地変下に動く」　・災祥　禍福。「災」は災と同じ。『書経』咸有一徳に「惟れ天の災祥を下す、徳に在り」

しだれ柳のみなとで君を送ろうとして、小秦王曲を詠唱した。今日はいささかともに酔い、明日はおのおの郷里を離れる。海辺の妖気はまさにきびしく、天変しきりに禍福を告げる。志士は人民の悲惨な運命をおもうのみ、別離は感傷するに足らぬのだ。

藤森弘菴曰く　無限悲懐。

雑懐

神武一大統
君臣本整然
武徳克止戈
雍睦幾百年
文物西來後
我道藉此傳

神武の一大統
君臣　本　整然
武徳　克く戈を止め
雍睦　幾百年
文物　西来の後
我が道　此を藉りて伝ふ

第悟結縄世
遺事多渺綿
久哉陋俗見
華夷誤後先
安得大金笼
刮醒腐儒眠

第だ悟しむ「結縄の世」
遺事多く渺綿
久しい哉陋俗の見
華夷後先を誤る
安んぞ大金笼もて
腐儒の眠りを刮醒するを得ん

（本文第六葉裏）

・神武一大統　神武天皇にはじまる皇統。『史記』伯夷伝に「王者大統」　・君臣　『易経』序卦に「君臣ありて然る後上下あり」　武徳克止戈　武の徳は戦争をやめさせるにある。『説文』武に「楚の荘王曰く、夫れ武は功を定め兵を戢む、故に止戈を武となす」武の字が止と戈の二字を組み合せてあるのは戈（兵器）をやめさせるのが武の目的であろかゝだという。字源説としては正しくないが長く人々に信ぜられた。　・雍睦　やわらぎしたしむ。陳の徐陵の「晋陵太守王劭徳政碑」に「家門雍睦　孝友風をなす」　結縄世　太古。文字のなかった時代に縄を結んで契約のしるしとしたといわれる。　渺綿　不分明。　・陋俗　野卑というほどの意。　・華夷　華は礼文の盛な国、夷はその反対語。中国はみずから華と称したので、日本の儒者の中には、中国を華としみずから夷と称するものもあった。小太郎はこれを「後先を誤る」と考える。　・金笼　眼科医が手術に使うメス。『涅槃経』に「盲人あり、良医に詣る。医すなはち金鎖を以て其の眼膜を刮る」笼と鎖と同義。杜甫「秋日夔府咏懐」に「金鎖空しく眼を刮り、鏡象未だ詮を離れ

ず」・腐儒　くされ儒者・『漢書』英布伝に「天下の為に安んぞ腐儒を用わん」

神武以来の皇統により、君臣の分は本来整どしていたのだ。武の徳は戦乱を停止して　国内親睦すること幾百年。文物が西方から渡来の後　わが国の道徳もこれを借りて伝えた。ただ惜しむらくは文字以前の太古の事は　遺存するものも多くはけっきりせぬ。久しいことだ卑俗の見解から、華夷分別のあとさきを誤ることの。何とが強大なメスでもって　腐れ儒者どもの目のうろこ剝がしてやれぬか。

以上二十三首、谷鉄臣圏点。

わが国で刊行された漢詩集を読んで煩わしく感ずることにひとつに評点がある。評点もまた批評作業のひとつであるから、すぐれた詩人や批評家によって極めて慎重になされたものならば、それ自体が興味深かるべきものだが、そんなものはまれで　一種の社交儀礼のあらわれにすぎめ場合が多い。『南冠集』の刊本の姿をなるべく伝えたいと思って谷鉄臣の圏点を保存したが　その批評は與平小太郎の詩に対して深切とはいえない。

斎藤拙堂・藤森弘菴の評語のある詩は、獄中の作ではなく、小太郎の平生作で、評語は相見の際に示して得たものではなかろうか。

（本文第七葉表）

文

讀離騷

甚矣哉文辞之無益於世也余每讀離騷未嘗不釋卷而太息流涕也嗚呼周末之嫺於文辞者莫如屈原爲千歲之下使讀者想其眷戀故都不忍去之誠黯然不堪感愴而當時不能一回懷王之志者何也原之後唯漢賈誼善學其辞而誼亦以不遇終宋朱熹注此書而朱熹亦以不遇終嗚呼何其文辞之無益於世也今也世與文又遠甚矣而才學之士區々欲以文辞施於世而傳于後悲夫

離騷を読む

甚しいかな、文辞の世に益なきや。われ離騷を読むごとに　いまだかつて卷を釈きて太息流涕せずんばあらざるなり。ああ　周末の文辞に嫺ふ者、屈原に如くなし。千歲のもと読者をして、その故都を眷恋し去るに忍びざるの誠を想へば、黯然として感愴に堪へざらしむ。しかるに当時、一たびも懐王の志をめぐらす能はざりしものは、何ぞや。原の後、ただ漢の賈誼のみよくその辞を学べり。しかるに誼もまた不遇をもって終る。宋の朱熹この書に注す。しかるに朱熹もまた不遇をもって終る。ああ　何ぞそれ文辞の世に益なきや。今や、世と文とまた遠きこと甚し。しかるに才学の士、区区として文辞をもって世に施して後に伝へんとす。悲しいかな。

・離騒　戦国時代　楚の王族で大夫であった屈原が　その仕える懐王に信任されない憂いをのべた文章で『楚辞』の一篇。　嗚呼　嗚呼の誤り。　周　西紀前一一〇〇ごろから前二五六まで続いた中国の朝廷。屈原は前三四〇ー前二七八の人だから周末に生きたことになる。　・嫻習熟すること。　眷懐　こいしたう。　・黯然　心のめいるさま。　感愴　いたみかなしむ。賈誼（前二〇一？ー前一六九？）前漢の文人で「鵩鳥賦」「弔屈原賦」などの作がある。朱熹（一一三〇ー一二〇〇）朱子学の祖。『論語集注』がその主著だが、楚辞の注に『楚辞集注』がある。　・區々　こせこせ。　傳千後　傳千後の誤り。

ひどいものだ、文章の世に役立たぬことは。わたしは「離騒」を読むたびに本をほうりだしてため息つき涙を流さぬことはない。ああ、周代末期の文章家で屈原に及ぶ者はない。千年のちにも読者はかれの故国を恋うて去るに忍びぬ忠誠を想い、黯然としてその傷ましさに堪えがたくさせられる。しかも当時ひとたびも懐王の心を　ひるがえし得なかったのは　なぜか。屈原の後、ただ漢の賈誼だけが、その文章の本領を学び得た。が、賈誼もまた不遇に終った。宋の朱熹はこの書の注釈をつくった。が朱熹もまた不遇に終った。ああ　なんと文章の世に役立たぬことか。今や、世と文と隔離することさらに甚だしい。だのに才学の士がなおこせこせと文章を書き世にあらわし後につたえようとする。あわれなものだ。

伍子胥論

（本文第七葉裏）

水之爲性也就下耳及其激之也瀦爲洄奔爲湍飛爲瀑其蒸之也上而爲雨滋潤萬物若蓄之以器經久則色變而孑々生之水無情物也而激則生勢否則徒生孑々焉其在人也胡獨不然昔者伍子胥之在楚也其父兄固已知其非庸材也然使楚無殺父兄之事以得終保其祿位則亦不過爲楚之一善士耳何以能成大功哉一旦見父兄之戮怒而奔吳至乞食於市人而不辭豈特不辭亦不自知其乞食之爲辱也是以他日能說吳王亡楚鞭平王之尸以其餘威覆越破齊霸盟中國終以吳顯天下萬世所以如此者何也激之以父兄之讐也雖然子胥非知人臣之義者觀其出所之際躁妄尤甚且觀其所以爲吳謀者浮誇之氣常見於其間入郢之役可以見矣此固非天資超邁卞略過絕人者也非有所激安能至此但其於所激而激焉是非庸材也已蘇秦戰國之一游士耳及受妻嫂之辱發憤爲學三年不眠遂以取六國相印彼其心初不過欲富貴耳然一受妻嫂之辱乃能激如之況於子胥之才而激之以父兄之讐乎夫子胥蘇秦之所爲洄不足道未可比諸雨之滋潤萬物也然是能爲洄爲湍爲瀑者也今也世之人率遇所激而不知激往々卒於老死無聞猶死水之生孑々是亦子胥蘇秦之所恥也可不戒哉　（吳顯天下　第八葉表。知激往々、康八葉裏）

吳子胥論

水の性たるや、下に就くのみ。そのこれを激するに及びてや、瀦りて洄となり　奔って湍となり、飛びて瀑となる。そのこれを蒸すや、上りて雨となり万物を滋潤す。もしこれを蓄ふるに器をもってし久しきを経れば、則ち色変じて孑孑これに生ず。水は情なき物なり。しかるに激すれば則ち勢を生じ、否ならば則ちいたづらに孑孑を生ず。その人におけるや　なんぞ独りしからざらん。むかし伍子胥の楚に在るや、その父兄はもとよりすでにその庸材にあらざるを知るなり。しかれ

ども楚をして父兄を殺すの事なくもって終にその禄位を保たしめば、則ちまた楚の一善士たるにすぎざるのみ。何をもってか能く大功を成さんや。一旦、父兄の戮せらるるを見、怒りて呉に奔り　市人に乞食して辞せざるに至る。豈にただに辞せざるのみならず　また自らその乞食の辱たるを知らざるなり。ここをもって　他日よく呉王を説いて楚を亡ぼし平王の尸に鞭うち　その余威をもって越を覆し斉を破り中国に覇盟し終に呉を以て天下万世に顕れしむ。かくのごとき所以のものは何ぞや。これを激するに父兄の讐をもってすればなり。しかりといへども子胥は人臣の義を知る者にあらず。その出処の際を観るに、躁妄もっとも甚し。かつその呉のために謀る所以のものを観るに、浮誇の気つねにその間にあらはる。入郢の役　もって見るべし。これもとより天資超邁才略過絶の人たる者にあらざるなり。激するところあるにあらずんば、いづくんぞ能くここに至らん。ただ、その激するところにおいて激す。これ庸材にあらざるのみ。蘇秦は戦国の一游士のみ。妻嫂の辱しめを受くるに及び　発憤して学ををさめ三年眠らず　遂にもって六国の相印を取る。彼のその心　初めは富貴を欲するに過ぎざるのみ。しかるに一たび妻嫂の辱しめを受けて、乃ちよく激することかくのごとし。況んや子胥の才においてこれを激するに父兄の讐をもってするをや。それ子胥と蘇秦の洄となるところは道ふにたらず。いまだこれを雨の万物を滋潤するに比すべからざるなり。しかれどもこれ能く洄となり湍となり瀑となる者なり。今や　世の人はおほむね激するところに遇ひて激するを知らず。往往、老死に卒して聞ゆるなきこと猶ほ死水の子子を生ずるがごとし。これまた子胥と蘇秦の恥づるところなり。戒めざるべけんや。

・呉子胥（？―前四八四）　春秋末期の楚の人。父は忠臣だったが讒言を信じた平王に殺され ついで二人の兄も殺されたので呉に逃げ　呉王を説いて楚の都の郢に入り、すでに死んでいた平王の墓をあばいて死屍に鞭うつこと三百回。のち讒言を信じた呉王に殺された。『史記』にその伝がある。　・固已知　固已知の誤り。　出所　たぶん出処とする方がよいだろう。

水の性格は、低い方へゆこうとするだけだ。これを激動させるや　たまって川となり　走って急流となり、飛んで瀑布となる。蒸発させると　昇って雨となり万物をうるおす。もし器にたくわえて久しくなれば、色が変ってボウフラがわく。水は感情のないものだ。が　激動させれば勢いがわき、でなければただボウフラがわくだけ。人間についても、どうしてそうでなかろう。

むかし呉子胥が楚にいたころ、その父兄は、もとよりすでにかれが凡才でないことを知っていた。しかし楚の国がかれの父兄を殺さずかれにも禄位を与えていたとするなら、かれは楚のひとりの善き人だっただけ。どうして大功をなしとげえたろう。

・ある日、父兄の殺されるのを見た。怒って呉に出奔し　市人相手に乞食するのも否まなかった。否まぬだけではない、みずから乞食を恥とも考えなかった。かくて後に、呉王に説き楚を亡し平王の屍に鞭うつことができ、その余勢で越をくつがえし斉をやぶり中原で覇者として盟主となり終に呉の国の名声を天下万世にあらわした。

このようであったのはなぜか。父兄の仇がかれを激動したからだ。だが子胥は人臣としての理義を知る者ではない。その出処進退を見ると、躁妄はなはだしく、さらに呉のために策謀したと二

ろを見ると浮誇の調子がいつもそこらにあらわれ、楚都郢に入城した戦役ではそれがよくわかる。かれはもとより天性すぐれ才略なみはずれた人ではない。激動させられたのでなければここまでゆけようか。ただ激動させられたことに激動し得た　これは凡庸の材ではない。

蘇秦は戦国時代の遊説の士のひとりにすぎぬ。妻や嫂に侮辱されるに忍んで　発憤して学問し三年不眠不休　かくて六国の大臣の印綬を帯びた。かれの本心は初めは富貴を望んだにすぎぬ。が、ひとたび妻や嫂の侮辱をうけると、かくまでに激動し得た。まして子胥ほどのオあるところへ父兄の仇によって激動したのだ。

呉子胥　蘇秦が「川」となってなしたことはことあげするに足らぬ。これを雨が万物を潤すのにたぐえることはできぬ。しかし「川」となり「急流」となり「瀑布」となり得た者だ。

現今、世の人は、おおむね激動すべき機会に遭遇しても激動することを知らず、往往老いぼれて死に名声なく朽ちた水がボウフラをわかすみたいだ。これこそ呉子胥・蘇秦の恥じるところであった。自戒せずにおれようか。

藤森弘菴曰く　才筆縱橫、喜ぶべし、然れども予は其の衰徑に流れんことを恐るるのみ。

青山延光曰く、終篇激字を以て骨子となし、立言大いに佳。

跋　湊川碑後

右碑面八字水戸義公所書也其陰之文則明徵士朱舜水所撰也嗟夫舜水朱明之宗室也明亡而歸化其意蓋欲有所籍以克復者其於楠公之事義氣相感焉宜其不能默々以止也雖然楠公之於後醍醐天皇未嘗有一日之恩澤及一旦降詔安以方鎮之任舊然感激許國以身至于三世殉國宗族殆盡其義氣未嘗少衰也噫當時使公在宗室之末當元帥之任其功業宜如何也必當躋周召之位建郭李之勳使後醍醐天皇復位不足道已彼舜水者明家之宗室而當其亡曾不能舉一旅之衆以報其讎又不能以身殉國而甘爲萬里海外之客非唯愧其國夷齊之徒楠公有靈豈不掣肘於地下哉　（安以方鎮之任、第九葉表）

湊川の碑の後に跋す

右の碑面八字は水戸義公の書く所なり。その陰の文は則ち明の徵士なる朱舜水の撰す所なり。ああ　舜水は朱明の宗室なり。明亡びて帰化す。その意はけだし籍る所あってもって克復せんと欲するものならん。その楠公の事における　義氣相感ず。よろしくそれ默默としてもって止む能はざるべきなり。しかりといへども、楠公の後醍醐天皇における、いまだかつて一日の恩沢あらず。一旦、詔を降して安めるに方鎮の任をもってするに及び、奮然感激　国に許すに身をもってし、三世国に殉じ、宗族ほとんど尽くるに至って、その義氣いまだかつて少しも衰へざるなり。ああ、当時、公をして宗室の末にありて元帥の任に当らしめば　その功業よろしく如何なるべきぞや。かならずまさに周召の位に躋り郭李の勳を建てしなるべし。後醍醐天皇をして位に復せしむる、道ふに足らざるのみ。かの舜水なる者は　明の宗室にして、その亡ぶるに当ってかつて一旅の衆を挙げてもってその讎を報ずる能はず、また身をもって国に殉ずる能はずして、甘んじて万里海外

の客となる。ただにその国の夷斉の徒に愧づるのみにあらず　楠公をして霊あらしめば、あに地下に顰蹙せざらんや

水戸義公　徳川光圀（一六二八―一七〇〇）水戸藩第二代藩主。元禄五年秋、碑を湊川に建て「嗚呼忠臣楠子之墓」と題した。　・徵士　学徳高く　朝廷から招かれながら官職につかない人。・朱舜水　朱之瑜（一六〇〇―一六八二）のこと。舜水はその号。明末　浙江余姚に生れ　長じて徵されたが辞し、朝命を奉ぜず人臣の礼なしとして弾劾され　避けて舟山・日本　交趾と転々し舟山に帰った。明が亡び清が四方を定めたので、日本に亡命し、水戸の賓儒となった。　宗室　皇族から出た家。　楠公　楠正成（一二九四―一三三六）河内金剛山西の豪士、元弘元年後醍醐天皇が笠置に潜幸するに及び赤坂の楠城に拠って勤王の軍を挙げ、天皇が幕府の軍にとらえられると護良親王を迎え幕軍を苦しめた。十月　親王と共に紀伊方面に脱出　二年、金剛山に千早城を築いて幕軍を攻め　建武中興に摂津河内両国の守となった。足利尊氏が鎌倉で反すると京都を守備し、延元元年正月、足利軍を西に撃退　五月、九州から東上する足利軍を湊川でむかえ撃ったが、足利軍に包囲され戦死した。　周召　周の成王を輔佐して周朝草創の事業をなしとげた周公と召公。　郭李　漢代の名将の郭去病と李広。　夷齊　夷齊の誤り。伯夷と叔斉。周の武王が文王の死後、殷の紂王を伐とうとするのを諫めて聞かれず　周が天下を平定したのちその粟を食わずといって首陽山に入って餓死した、と伝える。　未嘗有…　未嘗有…の誤り。

石の碑の表面の八字は水戸の義公の書いたものだ。その裏面の文章こそ明の微士の朱舜水の作ったものだ。ああ、舜水は朱氏を天子とする明国の皇室筋の人だ。明が亡びて帰化したのは、その意向は、たぶん日本の力を借りて明の皇室を復興しようとしたのであろう。楠公の事について義気に感じ　だまってすますわけにはゆかなかったのだろう。

けれども　楠公は後醍醐天皇との間で　一日の恩沢を与えられたこともなかった。いったん詔勅が降り地方の鎮めを安任されると　奮然として感激し　身を国に捧げ　三代にわたって国に殉じ親族はほとんど滅亡して、その義気は少しも衰えなかった。ああ　当時、公を皇室の末族として元帥の任に当らせていたら、その功業はいかほどであったろう。きっと周公　召公の位置にのぼり　郭去病　李広の勲をたてたであろう。後醍醐天皇の復位なんぞいうまでもない。

あの舜水なる人は　明の皇室筋だったが　その亡国の際　一箇の軍隊を挙げてその仇にむくいることもできず、身をもって国に殉ずることもできず　はるかな外国での亡命者たるに甘んじている。これではその国の伯夷　叔斉の徒に恥ずべきだけではなく　楠公に霊ありとすれば地下で眉をひそめるのではないか。

富國強兵論

國家之憂不在兵器之不備而在人物之不足不在府庫之虚耗而在百姓之怨苦能以小克大以寡制衆雖兵器不備謂之強兵可也凶飢困厄而民不怨畔則雖府庫虚耗謂之富國可也故富國強兵王者之要道也而商

鞅輩安假其名卒以滅國破家而後世見其迹遂廢其名是所以愍噎而廢食者也夫鞅之所謂富國者區々富其境内耳强兵者强其三軍耳至乎富天下之民强天下之兵則非其所知也故秦用其法利六國六國已既滅矣秦亦隨滅吾以此知鞅術之小也夫以小克大以寡制衆豈有異術哉昔者我楠公以僅々數百之兵守孤城而北條氏百萬之衆不能攻蒙古兵十萬連巨艦以寇我以短兵一戰殲之故强兵之術不在衆寡不在器械在乎得人心欲得人心須先得其人而任之任得其人是强兵之本也太誓曰受有臣億萬惟億萬心予有臣三千惟一心傳曰國不以利爲利以義爲利紂有鹿臺秦政有阿房董卓積聚百萬而身卒戮死自古覇貨喪身者不可勝數謂之富可乎唐堯九載之澇殷湯七祝之旱民未有飢渴者可謂富乎此利義之辨而本末之分也國家之憂莫大於有人而不任與任不得其人有人而不任猶病而不醫也任不得其人者猶藥而不當也不醫者雖病不瘳未受藥之害藥而不當者其害也深矣人見其害也遂弃醫以至于死而不悟哀哉嗚呼堯湯武及楠公皆得其人以富國强兵由是觀之任得其人豈非富國强兵之本耶　（强兵可也、第九葉裏。人心須先得其人　第十葉表。强兵由是觀之　第十葉裏）

富国强兵論

国家の憂ひは兵器の不備にあらずして人物の不足にあり。府庫の虚耗にあらずして百姓の怨苦にあり。よく小をもって大に克ち寡をもって衆を制すれば　兵器不備といへどもこれを强兵といひて可なり。凶飢困厄して民怨畔せずんば、則ち府庫虚耗といへどもこれを富国といひて可なり。故に富国强兵は王者の要道なり。しかるに商鞅の輩は妄りにその名を仮って卒にもって国を滅し家を破る。しかして後世その迹を見てつひにその名を廢す。これいはゆる噎に愍りて食を廢する

ものなり。それ鞅のいはゆる富国なるものは　区区としてその境内を富ますのみ　強兵なるものはその三軍を強くするのみ。天下の民を富ませ天下の兵を強くするに至りては則ちその知るところにあらざるなり。故に秦はその法を用ゐて六国を制す。六国すでに滅びたり・秦もまた随って滅びぬ。われこれをもって鞅の術の小を知るなり。それ小をもって大に克ち寡をもって衆を制する、あに異術あらんや・むかしわが楠公　僅僅数百の兵をもって孤城を守って、北条氏百万の衆も攻むる能はず。蒙古の兵十万、巨磯を連ねて寇するに、われは短兵をもって一戦してこれを殲せり。故に強兵の術は、衆寡にあらず器械にあらず、人心を得るにあり。人心を得んと欲せば　すべからくまづその人を得てこれを任ずべし。任じてその人を得る　これ強兵の本なり。太誓に曰く　受は臣億万あるもこれ億万の心、予に臣三千ありこれ一心と。伝に曰く　国は利をもって利となさず、義をもって利となすと。紂に鹿台あり、秦政に阿房あり　董卓は百万を積聚す　しかも身は卒に戮死せり。古より貨を黷し身を喪ふ者、勝げて数ふべからず。これを富といひて可ならんや。唐堯九載の涓、殷湯七祝の旱　民いまだ飢渇せる者あらず、富めりといふべきか。これ利義の弁にして本末の分なり。国家の憂ひは、人ありて任ぜざると任じてその人を得ざるとより大なるはなし。人ありて任ぜざるはなほ病みて医せざるがごとし・任じてその人を得ざるはなほ葉して当らざるがごときなり。医せざる者は病みて瘳えずといへどもいまだ薬の害を受けず。葉して当らざる者はその害や深し。人その害を見るや遂に医を弄してもって死に至りて悟らず。哀しいかな・ああ　堯湯武および楠公　みなその人を得てもって国を富ませ兵を強うす。これによってこれを観れば、任じてその人を得るはあに富国強兵の本にあらずや。

商鞅　戦国時代の人、法家の学をまなび　秦の孝公にはえ、富国強兵をめざして改革し、秦の天下統一の基礎を作り　惠文王のとき暗殺された。　大誓　『書経』周書　泰誓。周の武王の十三年春　孟津で会盟したときの武王の演説のことば。　受　殷の紂王の名。　・偉　ここでは『礼記』大学をさす。　鹿臺　殷の紂王が財宝を貯えた倉庫。　阿房　秦の始皇（政はその名）の築いた大宮殿の名。董卓　後漢末の豪雄。霊帝の死を聞くと兵を率いて入朝し　少帝を奏して献帝を立て、凶暴甚しかったが、部下の将呂布に殺された。　・七祀　おそらく七祀の誤りであろう。それなら　七年。『尓雅』釈天に「載は年なり。夏には歲といひ、商には祀といひ周には年といひ、唐虞は載といふ」　・弄　棄の古字。

国家にとっての憂慮すべき問題は　兵器の不備にはなく　人物の不足にある。経済の弱少にはなく人民の怨苦にある。小国で大国を克服し、少数で多数を制圧しうるなら、兵器が不備であっても、これを強兵といってよい。飢饉災害にも人民が離反せぬなら　経済が弱少であっても、これを富国といってよい。だから富国強兵は王者の要道なのだ。ところが商鞅らの連中が「富国強兵」の名称を乱用し、ついに国家を破滅させたので　後世の人はその結果を見てその名称を廃止した。これは「のどにつまったのに怒りて食事をやめる」というようなものだ。

あの商鞅のいう富国とはわずかに自国を富ませるだけ、強兵とは自国の軍隊を強くするだけ。天下の人民を富ませ天下の軍備を強化することはかれらの念頭にない。だから秦は方法を用いて六国を制圧し六国はすでに滅びた。秦もまたついで滅びた。わたしはそのことによって商鞅の術

策の小さを知るのだ。

小国で大国を克服し少数で多数を制圧するのにどうして不思議な術があろう。むかしわが楠公はたった数百の兵で孤城を守り、北条氏百万の軍は攻めることができず、蒙古の兵十万が巨砲をつらねて来寇し、わが軍は短兵で一戦してこれを殲滅した。だから強兵の術は多数少数になく器械になく、人民の心を得るにある。人民の心を得ようとするなら　指導者に適切な人をまず得て、これを任用すべきだ。任用した人が適切であること、これが強兵の根本なのだ。

『書経』太誓にいう「（殷の紂王）受は億万の臣をもっているがかれらの心は億万に分裂し、わたし（周の武王）は三千の臣をもつだけだがその心は一つに結束している」と。その注釈というべき『礼記』の大学にいう「国は私利を利益とせず正義を利益とする」と。紂王には鹿臺があり、秦の始皇に阿房宮があり、董卓は財宝百万を集積したが、その身はついに殺戮された。古来財貨を私して身を滅ぼした者は数えきれぬ。これを富といってよかろうか。帝堯の代に九年にわたる長雨があり、殷の湯王の代に七年にわたる日照りがあったが、人民に飢渇する者はいなかった。富ということができようか。これが利義と本末のわかれめなのだ。

国家にとって憂慮すべき問題で　人があっても任用しないことと任用してその人が適切でないことより大きなことはない。人があっても任用せぬのは、病気して医者にかからぬようなもの。任用してその人が適切でないのは投薬がまちがっているようなものだ。医者にかからぬと病気はなおらぬが薬の害は受けぬ。投薬がまちがえばその害は深い。人がその害を見て、そこで医者をすてて死んでしまうまで悟らぬ。あわれなものだ。

ああ、帝堯、湯王　武王、および楠公はみな適切な人材を得て富国強兵であった。これによって観察すれば、任用して適切な人材を得ることこそ　富国強兵の根本ではないだろうか。

藤森弘菴曰く　この篇の議論、最も条理あり。

附　録

（本文十一　葉表）

奥平広胖伝

奥平広胖、字は潤卿、与三左衛門と称す。丹波亀山の人。系は松平好景の第康定より出づ。康定の子は成氷たり。佐倉の城主松平家信その賢を聞き、延いて客卿となし任ずるに藩政を以てす。子の広方に至り始めて臣の礼を執り、その君と同氏なるを以て嫌を避け、外家奥平氏を冒す。広方の子の広武、城主信岑の亀山城に移るに従ふ。これを曾祖となす。祖広知、父広問　世よ老職なり。広問は機略あり。天明中、京師の火の禁中に延びしとき、城主信忠、諸臣を率いて救ひに赴く。広問先駆し既に禁門下馬牌前に至る。下馬すれば則ち機を失す。乃ち外套を脱し牌を掩ひて進む。城主これに従ひ、直ちに禁中に入り、帝を猶煙の間に負ひて出づ。後、城主の功を以て褒を受くるは広問の力なり。広胖、生れて六歳、父を喪ひ、禄七百石を襲ぐ。寛政十二年　年寄となり、享和二年、番頭を兼ね、文化三年、度支を管す。甫めて二十四。この時、紀綱頽弛し、倉廩しばしば空し。年寄西脇總左これを更張するに意あり。広胖および松平新祐を引き佐となす。広胖は少くして多病、掩晦して才鋒を露はさず。ここに至って慨然として国家を以て自ら任じ、

職に居ること厳正、事に処すること果断、圭角峣々たり。人始めてこれを異とす。然れども忌む者の沮む所となり、言は多く行はれず。既にして西脇敗れ、広胖もまた罷めらる。後の執政者は奸汙奢靡、国事大いに壊る。広胖、書を新祐に寄せ、諸執政の罪および君夫人の豪奢の事を論ず。時に新祐は江邸にあり。夫人、聞きて憤恚し、これをその父なる白川侯松平定信に告ぐ。定信、嗔じて曰く、かれ忌諱を避けず剴論することかくの如し。われ汝の為に一忠臣を得たるを賀するなり。汝なんの恨むことかこれあらんと。心にその大いに用うべきを知る。時に大阪の富商桝屋なる者あり。財を生ずる策を建白す。執政これを用う。広胖ひとりその奸竊を覚り、桝屋を詰って曰く、汝は建白する所あって未だ成功を見ざるに自ら利することはなはだ多し。汝、説あらば弁ぜよと。桝屋、慚服謝罪す。広胖よって曰く、他日緩急あらば汝よく金をわれに貸さんか、われ為に汝の罪を掩はんと。桝屋感泣して曰く、ただ命をこれ奉ぜんと。乃ち戒めて洩すなし。八年、また年寄兼番頭となる。十年、度支を管す。その言また行はれず。遂に上書して職を辞せんとす。聴されず。十三年、再辞して始めて番頭度支を免ぜらる。この歳、城主信豪あらたに立ち年はじめて七歳、政は多門より出で、綱紀ますます弛み、国用大いに窘し。白川侯、外戚を以てともに藩政を聴く。諸老をして各おの釐革の方を言はしむ。その言おほく抵牾す。侯、大怒して曰く、汝ら重職に居り宜しく同心戮力し以て国家の急を済ふべし。しかるにその言の同じからざること、かくの如し。われまたこれを奈何ともするなし。しばらくその為す所に任さんと。独り広胖の言を奇とし、これを用ゐんと欲するも未だ果さず。十四年、また度支を領し、文政二年、番頭を兼ね、四年、疾を以て職を辞するも聴されず。これよりさき諸老ごもごも政を執る。甲の計竭き乃ち乙

に譲り、乙の術窮し乃ち丙を推し、各おの新政を行ひて国計ますます窮す。ここに至って手を束ねてなす所を知らず、始めて相謀って広胖に政を執らんことを請ふ。広胖うべなはず。乃ちその家に就き懇請して已まず。広胖曰く、諸君よく制肘するなきかと。曰く、固よりと。乃ち話す。諸老よってこれを白川侯に請ふ。侯、欣然として撫掌して曰く、広胖はじめて用うべしと。乃ち国政を挙げて広胖に委ね。広胖、初め西脇　松平と心を同じうして革政を謀りて行はれざるもの十五年、ここに始めてその志を得、奮然疾を力めて職に赴く。五年春　家老に還り佩刀を賜る。広胖ますます感激し、誓って任を辱しめず。遂に大阪にゆき枡屋の金数万両を借りて用を補ひまた諸財主に償ひ、然るのち入るを量って出づるをさめ侯家一切の冗費は尽くこれを節省す。また諸士を諭して勤倹奉公、暇には則ち相率ゐて山に入り薪を采らしむ。去秋、封内大水、隈防潰決し、壊田多く民窮困窮す。ここに至って広胖役を興さんことを思ふ。しかれども重ねて民を困しめんことを恐れ、諸士に諭してこれを修めしむ。諸士争って赴き、広胖親しくこれを董す。久しからずして功をあらはす。諸大臣これを見て自ら心安からず、争って禄米を献じて国用を助く。広胖の言たび度支を管するや、はじめにこの献あり。諸大臣はけだしこれに倣ふなり。冬広胖封内を巡行し、庶民に諭して曰く、近日国家窮乏し君臣遑々として安らかに寝食せず。汝らもまた逆情にして掠奪を忽にするなかれと。よって涕下ること数行。庶民感奮す。しかれども一物もこれを民に取らず。旧政の不便なるものは尽くこれを除く。年の春なるに及び、豪農富商の金を裔し米を輸り、貧者の新衆を携へて来献するもの絡繹として絶えず。時に諸財主もまた曰くわれら久しく侯家の恩を受く、あにこれを坐視すべけんやと。乃ち旧券を束ねて来献す。ここに

おいて庶政緒につき、いまだ数年ならざるに倉廩充実し蔚然として富饒なり。広胖すなはち枡屋に償ひ、余金を士民に分賜し以て前年の献に報ゆ。十二年　禄二百石を加へ城代に陞る。けだし革政の功を賞するなり。このとき白川侯すでに即世し、城主もっぱら政を聴く。しかして広胖の病漸く劇しく牀にあって事を決す。小人は間を窺ひ多方讒譖す。しかれども城主は広胖を敬ふこと父の如く、一月に三たび第に就き疾を視る。広胖つねに剴切に規諫す。城主ますますこれを憚る。天保八年、広胖卒し　讒すなはち行はる。その罪を追誣し　子広淵の禄を奪ひ禁錮終身。すでにして城主その先功を思ひ特に俸米を次子広厚に賜ひ以て奉祀せしむ。広胖の忠誠は天性より出づ。国を憂ひ家を忘れ、その禄米を献ずるにあたり家用給せず、典籍器具を売ってほとんど尽くれば則ち衣を縮め食を節し奴婢を畜ふる数人に過ぎず。大習院の僧もと広胖と善し。かつて一歌集を購はんと欲して金給せず。まさにこれを広胖に謀らんとして難ひてこれをその師にいふ。曰く、卑執政の倹は他人と異る、なんぞ試みにこれを誤らざると。僧これに従ふ。広胖はたしてその篤志に感じ、すなはち出して数金を与ふ。その倹にして吝ならざるかくの如し。平生多病、医につくこと京においてし大阪においてし歳におほむね両三次、病餌身を離さず。しかれども職務あるごとにこれに輿赴し、いまだ嘗て辞するに祈寒暑雨を以てせず。少しく間あれば則ち諸士を集め、諄々として教諭し、立志勤行せしめ文武諸芸を講ず。士風これがために一振し人材蔚興す。またよく人を用う。一奴あり、日に米三升を喫す、人厭ひて用ゐず。広胖すなはちこれを畜へ、よって諭して曰く、汝よろしく放飯を節すべし。しかれどもこれを遽かにすべからず。今日三合を節し日々節して常人の食に至りて止めんと。奴つとめてこれに従ふ。歳暮に至り、広胖そ

の節する所の米価を合計してこれに与へて曰く、われ米を愛しむにあらざるなりと。奴は感喜して終身放飯せず。その諸吏を用うることまたこれに類す。放蕩不羈の士ことごとくこれを軌物に納めその意の如くならざるなし。しかれども人となり明察厳励　人の過を容す能はず。革政の初め巷議囂々。広胖すなはちその人を家に延いて曰く、君の議するところ洵に然り。しかれどもわが計別に出だす所なし。君名策あらば幸に教へよと。曰く　無しと。乃ち声を励して曰く、すでに策なくして人を議す。これ誹謗にあらずんば則ち婢嫉のみ。士たる者よろしくかくの如くなるべけんやと。これより人また巷議することなし。修陵の役に茶を禁ず。一士ありこれを犯す。広胖大叱して曰く、事は小なりと雖もこれわが令を奉ぜざるなりと。命じてこれを去る。これより人また法を犯すことなし。一藩粛然として怨望する者もまた寡かうず。故にその死せしのち議誣つひに行はるるのみ。広胖は文武諸芸まなばざる所なく最も筆札に妙なり。漢学の師は皆川淇園、世称して出藍となす。卒年五十四。百姓流涕してこれを惜まざるなし。私謚して曰く、忠武。

中洲小史曰く、聖賢の富国の道を論ずるもの至れり尽せり。しかるに後世その迂濶を疑ひ　やもすれば孔（僅）桑（公羊）の民より取りて上を益すの術を奉じ、上いまだ益さずして民の怨み結び以て事を敗るもの比々として皆これなり。奥平潤卿、すでにその国を富ませ名声籍々。豊岡家老船木外記、人をして来り問はしめて曰く、君は何を以てかこれを致すやと。潤卿答へて曰く、魯論に云はずや、百姓足る、君いづれか足らざらんと。僕これを奉ずるのみ、また奇策妙術なしと。ああ潤卿の如きは聖賢富国の道を知る者か。

この篇　余が二十年前の作に係る。余、幼にして潤卿の事功を先師山田翁に聞き、その人の大

略を記す。既にして潤卿の姪孫小太郎と昌平校に交はりその詳を聴き、遂にこれが伝を作る。しかるに、稿を失すること久し。ちかごろ故紙を閲してこれを獲たり。その文兄長觀るに足らず。しかれども潤卿の事功また没するに忍びず。しばらく存録して以て他日の刪定を待つ。時に明治十二年二月。

鶯津毅堂曰く　三島君在藩の日、志紀済に存す。故に広胖伝を作り、小大遺さず。

跋

興平蔵六　戊午の春を以て東遊し、昌平黌に寓し、星翁及び頼三樹の書を携へて余を訪ふ。爾後　朝昏来往し、其の人となりを悉にす。蔵六、温和にして志気あり、絶えて少年軽浮の習なし。余甚だ之を愛す。己未の冬、罪を幕府に得、其の藩に幽閉せらる。藩　幕府を畏れ　更に其の罪を窮治し　獄舎に厳繫す。其の父某、藩の儒員を以て政務に参預し、其の善く教へざるを以て也た其の職を褫ふ。某憤懣し病を発して死す。蔵六　獄に在りて之を聞き、悲痛自ら禁ぜず亦た病を発して斃る。余謂へらく　蔵六は罪を得べき者に非ず、蓋し星翁三樹諸子の事に累せしなり。嗚呼、戊午の獄、正士の枉冤に遭ひし者極めて多し。而して蔵六の如きは其の最も甚しき者なり矣。其の父子の死は真に憫れむべきなり。頃ろ其の獄中の詩の題して南冠集と曰ふを得たり、今数首を摘録す。

右、余が詩屏風所載の小伝也。録して以て此の巻の跋語に代ふ。時に　明治廿七年一月初九

日　湖山八十一老人小野憲

『詩屏風』は、湖山が知友の詩を集め、小伝と簡評を加えたもので、その第一、二集は嘉永元年、三十五歳で、第三、四集は明治十九年、七十三歳で刊行した。小太郎の作をのせるのはその第三集で、「蔵六與平穆」と号氏名を掲げ、小伝に「穆字士雍号蔵六称小太郎丹波亀山藩士」と記し、つづいて右の跋文に当る記事があり、「在獄詠雪」「獄中謝人餽食」「無題二首」の四首を收め「評」に「二首蓋西帰道中作○巻中有網密呑舟魚最苦夏傾瞰室鬼応歓懐家双涙灑南層報国寸心悲北風句皆使人酸鼻」という。『南冠集』とやや異同があり、これについては後に記す。

跋

余　少時　昌平黌に在り。亀岡の與平君と交る。君は温厚寡言、矻矻として経を攻め、傍ら詩文を好み吟誦して自ら娯しむ。時に幕府の群小政を弄し、国事日びに非なり。黌中の有志者中夜相集ひ、談国事に及び、未だ嘗て扼腕切歯して痛罵せずんばあらざる也。君毎に傍に在り、独り沈黙して言はず　未だ始より国事を以て意を経ざる者の如し。何も無く水藩攘夷の獄起る焉。天下の志士の其の事に与る者、逮捕せられて遣す莫し。君も亦た獄に下る矣。衆謂へらく、君の夙に力を国事に尽せしは、その忠実の中に蘊れるに由りて然り。其の沈黙して言はざりしは　蓋し自ら懺悔する所ありしせと。既にして国家中興す。惜しい乎君親しく其の盛事を見るに及ばず久しく既に死せること矣。而して当時扼腕切歯して痛罵せし者、亦た皆慷慨して生を捨て死亡し尽

せり矣。余也遊みて風雲に会して功名を垂るる能はず、退いて自ら文運絶統の秋に振ふ能はず轗軻以て老ゆ焉。往事を追思し、豈に能く慨然たる無からんや。旧亀岡藩主松平公　君が幽囚中に作る所の詩の南冠集と曰ふ者を得、其の忠実にして幽囚せられ、既に死して顕はれざるを憫れみ　序を為つて之を刻ましむ。余之を披覧するに、其の詩は優柔にして温雅、其の中に自ら慨世憂国の意有り、殆んど其の人と為りの如し。君が昔時昌平黌に在りしを憶へば、沈黙して言はず、吟誦自ら娯しみし者　今猶ほ宛然として目に在り、涙涔涔として下り　卒読する能はざるせ。

友人　伊藤　和識す。

奥付

明治卅四年十二月二十日印刷
明治卅四年十二月廿五日發行

著者　故人　奥平川太郎　（代謄寫）

京都市三條通御幸町西入

發行兼印刷者　大谷仁兵衛

京都市三條通麩屋町東入

印刷所　敬愛社

四

奥平小太郎と親交のあった小野湖山も伊藤和も、小太郎の温厚をたたえる。ことに湖山は、かれに少年軽浮の習いなし、といった。切歯扼腕する志士の談論中で沈黙を守った、という伊藤のことばがこれを裏書きする。その小太郎が実際には国事に奔走していたとすれば、「伍子胥論」にいうように「激するところ」があったからに違いない。かれを「激」したのは何だったのか。近くはかれの属する藩の、遠くは日本全体の、当時の情勢であったろう。藩政の復興に身命を堵した従祖父広胖が死後追譴にあいその嗣子広淵が終身禁錮され、内憂外患こもごも到って国政が倒壊しようとするとき、英明の慶喜をしりぞけ幼弱の家茂を将軍に送んだ　亀山藩の、徳川幕府のありかたが、沈重なかれをも坐視させなかったのであろう。

ただ、かれの志士としての行動を伝える点で最も詳細な『人名辞書』の記事によっても、かれの行動が「尊皇攘夷」運動の中で具体的にどのような役割を果したのか、よくはわからない。梁川星巌が湖山にあてた書状で、かれをその父とともに「有志之者」といい、「京都此節之始末、細に相談置候間、御聞可被成候」といっているところから、星巌の密使として、江戸における水戸・薩摩など尊皇攘夷派諸士との連絡に当ったのかと、推臆することはできるけれども。

安政五年九月　星巌の死と前後していわゆる戊午の大獄が起る。星巌も小太郎も追究を受けるおそれのある品はあらかじめ消滅したといわれ　それが小太郎の場合、ことにその伝記を書きが

たくさせるのであろう。

ところで、かなり慎重であったらしい星巌の動きが、幕府の密偵によって相当詳細に報告されている。それなら星巌の下で五年も学んだ小太郎は監視されていたろうと察せられるのに、この年は捕えられず、大阪城代となった藩主の命によりその夫人を江戸から大阪に送る一行中にいる。この前後に、死罪にも遠島にもならずに追放されただけの池内陶所は、仲間を売った、との疑いを志士たちからかけられた。小太郎は陶所のように舞台上で踊った人ではないが、かれと接触した志士たちがかれを幕府側の「密偵」と疑っても言い解きがたい位置にあったわけであろう。

亀山藩主は、大阪城代であり、井伊家と姻戚関係にある。志士たちに関する情報は子細にはいっていたはずである。藩の重職の息子が「過激」な運動の中で際だちはじめたのを、あるいは藩主ないしその側近が手をまわし、かれの行動を束縛し志士たちと離間させようとして、夫人の護衛のうちにかれを加えたのではないか。そのような臆測をも誘う。

けれども、それらのいずれについても、今日となってはどうやら確かめがたいようである。かれについて入手し得た資料を綜合して、この程度の行動がなぜ終身禁錮に当るのかよくわからぬ。そのことはすでに内藤耻叟がいい、湖山がいう。

星巌の添書によって相会し、以後かなり久しく行動を共にした湖山が「罪を得べき者にあらず」という以上、たしかに「罪」はなかったのであろう。湖山はまた「けだし星翁・三樹諸子の事に累するなり」という。「累」とはまきぞえということである。星翁・三樹が志士としての功によって「罪」を得たとすれば、そのとき小太郎に「罪」がないとは志士としての功がなかったとい

うことになるかもしれぬ。

だとすると、亀岡の勤王僧の大橋默仙が京都の志士頼鴨涯のために寺内に碑を建て亀岡の「志士」小太郎のために碑を建てていないことも、気がかりながら、わからなくもない。

明治になって、志士のまだ生きている者には官爵を与え、死者には贈位等のことがあって、小太郎にそれが洩れているのも、かれに維新の志士としての「功」がなく徳川幕府に対する「罪」がなかったためであろうか。

だがまあ、そんなことはどうでもよい。他の人がかれのためにした記事には分明でないところがあるが、かれの詩文から察せられるその才識は、晋の景公が注目した南冠の囚人鍾儀とくらべてさほど見劣りのせぬもののようにも感ぜられる。鍾儀は異国の君主が認め大夫が薦め　朽つべき人材が光輝を放ち、二千年の後にまで語り伝えられた。小太郎は祖国において異国の人のように囚えられ、磨けば輝いたであろう才能が夭折した。

儒典に親しんだ当時の亀山藩の人々が、かれの死に、ある痛しさを感じたろうことは、想像するにかたくない。かれを獄舎につないだ人の後を嗣いだ藩主松平信正が、かれの死後四十年たって『南冠集』の編纂を首唱したというのは、そのはじらいの表現であろうか。

明治維新史における尊皇攘夷派の役割とその運動の価値、尊皇攘夷派における奥平小太郎の役割と評価、その前提としての亀山藩史の詳細な検討がさらになされてよいであろう。だがそのことには他になすべき人があろう。

わたしは『南冠集』を読んで感動し、その作者を知ろうとして、まず外的条件をたずねた。不

分明なところが多すぎるとはいえ、かれの詩文を理解する上でなにがしかの参考になった。しかし、外的条件をあつめて浮びあがってくる奥平小太郎像と『南冠集』を読んで浮びあがってくる奥平小太郎像のあいだにずれがある。詩文は作者の思考や感情の反映したものだが作者そのものでなく、思考や感情から出発しても作品として形成される過程で変形されるから、作品は思考や感情とも別箇の世界である。作品の世界から想像する作者像が他の条件から想像されるそれと異なるのは当然で、さきにいったずれなどは初めからとりあげる必要のないことだ。ただ、この幻のようなずれをゆすぶることで作品世界の輪郭が明瞭になる場合がある。で、徒労を覚悟で伝記研究という空漠たる作業にふみこむことをあきらめきれないのである。わたしはしかしこのあたりで実際的行為世界に生きた奥平小太郎から遠ざかり、詩文という「無益」な行為に生きた奥平小太郎に焦点をしぼる。

『南冠集』は序文を読むとすべてが獄中作のようにとれるが、詩注で触れたように、詩の若干は入獄前の作と察せられる。散文は、自序を除けば、すべて入獄前の作であろう。柴田の例言はその事情をことわらめが、斎藤・藤森・青山の評を付載することと、小野湖山が『湖山楼詩屏風』に記した「二首は蓋し西帰道中の作」という評言が、わたしの推測を強める。

さて、『詩屏風』に引く小太郎の作は次の四首。圏点は湖山が加えたもの。

在獄詠雪用駱賓王詠蟬詩韻

南冠形影座。朔吹雪威侵。曳杖有誰到。聳肩空獨吟。未晴天黯黯。無響夜沉沈。借彼玲瓏彩。照吾清潔心。

獄中謝人餽食

儒官身屢誤・荆棘命幾存・風雪深封屐・屐聲潜在門・味分飴蜜滑・情徹肺肝敦・一語無由接・作詩聊謝恩・

無題二首

朝在泮林夕繫收・人生如夢歳華流・不知到底歸何處・滄海茫茫一片舟・

月苦風悲滿地霜・山容水態共荒涼・寒威凜烈今如此・何處梅花放暗香・

第一首は本稿32頁の同題詩、第二首は66頁の「無題」其四、第四首は68頁の「無題」其五に該当するが文字に異同があり、第三首は該当作がない。文字のことでは評言中に引く、

網密呑舟魚最苦・憂傾瞰室鬼相歆　（49頁「無題」其六）

懐家雙涙洒南雁・報國寸心悲北風　（44頁「無題」其四）

にも異同がある。

湖山は前掲跋文（すなわち『詩屏風』の記事）に「頃得其獄中詩題曰南冠集今摘録數首」という。『詩屏風』の「三四集小引」に「其の三集四集を編みしは明治己巳に官を辞し西歸せしの後に在り、而して未だ之を刻するに及ばず、忽ち已に十六年を経たり」という。「己巳」は明治二年（一八六九）、「小引」の日付の「甲申秋」は十六年（一八八三）、発行は十九年（一八八六）である。それなら明治二年以前にすでに『南冠集』と題する奥平小太郎の集が、別の誰かの手で編まれ、刊行されたか、稿本であったか、写本であったかはわからぬにしても、それを湖山が見たことは、湖山のことばを事実とする限り、まちがいない。そうしてその本には、明治三十四年の本には載せぬ「朝在泮林……」の一首が存した。明治二年以前のものを甲本とし三十四年の本を乙本とすると、甲本には乙本に載せぬ他の詩がさらに若干首あったと疑うこともできる。また

作品の排列も甲乙両本は同じでなかったと疑える。
慶応三年以前の本を收める『国書總目録』に『南冠集』を著録し成簣堂文庫に蔵するとのみ記す。これが湖山の見たものと同じかどうかわからぬが、異るものと考える余地がある。
文字の異同は、本を異にすることによって生じたとも、湖山が原詩を添削したとも考えられる。これらの疑問を明らかにした上でなければ、正確な作品論は成立せぬ。いまのわたしには、しかし、そのいとまがない。ここでは乙本と『詩屏風』に掲げるものとによって管見の感想をのべるに止めるほかはない。
『書経』舜典に「詩は志を言ひ、歌は言を永うす」といい、『詩経』大序に「詩は志の之く所なり。心に在るを志となし、言に発するを詩となす」といった。また『礼記』楽記に「およそ音は人心に生ずるものなり。情の中に動く、故に声に形はる。声の文を成す、これを音といふ。この故に治世の音は安らぎて楽しむ。その政の和すればなり。乱世の音は怨みて怒る。その政の乖ければなり。亡国の音は哀しくして思む。その民の困しめばなり。声音の道は政と通ず」という。これが中国のことに儒教徒の文学の指導理念の根本である。要約すれば、志を言って政に通ずることが文学、ことに詩の、出発であり帰結であった。社会が複雑になれば、志の表現も、政治も、複雑多岐になり、詩人文人のありようもせまく限ることができないから、風流韻事や遊戯的作品も志の表現と言えぬわけでなく政治と通じないわけではないが、奥平小太郎はその詩文において儒教徒の文学理念を第一義につらぬこうとしこれを貫徹したようである。かれが教えを蒙った柳川星巌、藤森弘庵、斎藤拙堂　また友人であった小野湖山らも、その点では小太郎ほど徹底せぬ、

かれのイデオロギーは儒教だが、末流のそれではなく直ちに孔子にせまろうとする。星巌にはたてまえはたてまえとして現実の状況には適当に妥協する政略家的狡猾さがあって、それが星巌のみならずおおむねの儒教徒の実際だが、小太郎はそのような政略を政治とは考えぬ純粋性があり、「中行を得てこれと与せずんば必ずや狂狷か、狂者は進みて取り、狷者は爲さざる所あり」（論語・子路）と孔子がいったその狂と狷とがかれの行動のひなたとかげとになっていて、そこからかれの言語表現が溢れ出た、という感じがする。

「跋湊川碑後」の朱舜水批判の痛烈は次に引く湖山の「朱舜水先生墓」とならべると明らかだ。

安危成敗亦唯天　国家の安危　王事の成敗　また天命
絶海求援豈偶然　海をわたり援助を求めたのは　偶然だろうか
一片丹心空白骨　ひとひらのあかい心は　むなしく白骨
兩行哀涙洒黄泉　ふたすじの涙かなしく　黄泉にむかってそそぐ
豐碑尚記明徵士　大きな石碑に　なお記す　「明ノ徵士」と
優待曾逢國大賢　わが国の大賢の優待を受けられたのだ
莫恨孤棺葬殊域　かなしむな　孤独の棺が異域の土に葬むられたと
九州彊土盡腥膻　あなたの故郷に吹くものはただなまぐさい風ばかり

湖山のような見方が一般で、その後かさが世の拍手をかちえるのだが、小太郎はその論理のあいまい性を批判し尽している。かれがこれを詩においてせず散文においてしたことにも、かれの感性の論理がうかがわれる。

『詩屏風』に引かれた作品について、その文字の異同を検討すると『南冠集』中のものより『詩屏風』中のものの方が漢詩修辞の一般論からすればよくなっている。「報国寸心悲北風」と「報国一心悲北風」では、一心は寸心でなければならず『南冠集』の「一心」は「寸心」の点画が脱落したものと察しうる。だがその他のものは、『詩屏風』のものが修辞においてとともに、にもかかわらず詩としては失われたものが大きい。

日本の漢詩漢文は中国の詩文を源とし、つねにその養いを中国詩文から得、中国詩文の批評基準をみずからの批評基準としてきたのは、まぎれもない事実だけれども、しかしそれは中国の詩文ではなく、日本の詩文なのであって、小太郎の詩中の語をもってするなら「文物西来の後、我が道は此を藉りて伝ふ……久しい哉陋俗の見、華夷後先を誤る」で　中国の批評基準に義理だてして日本の詩をくびり殺すことはいらめのである。日本の詩としてよく中国の批評基準に照してなおよければこれに越したことはなけ、もはや日本の詩とも中国の詩ともいう必要はなく詩そのもので、すべての詩はそこに到ることを目指すものではあるけれども。

小太郎の詩はおおむね平易で、ことさらに注解を加えなくても、ひととおりの理解はできる。しかしその平易な表現の根底に学問教養があり　それが詩の奥行をひろげている。わたしの注がどの程度かれの詩の典拠をさぐり得たかはなはだ心もとないが、かれの読書の範囲が、四書五経はもとより、著名の史書　楚辞、文選、唐宋の諸文人学者におよび、仏典すらそのかたはしを窺っていたことは知られるだろう。

奥平小太郎は、日本語としての漢詩漢文で儒教徒としての志の文学をその源泉に照らし発輝しようとして挫折した、最後の詩人といえようか。

わたしはさきに「中野道遙」（人文論叢24号　一九七六年一月）で恋愛詩人としての漢詩人中野道遙について語った。恋愛と政治は相反するように見えようが　道遙にとっての恋愛はまさに小太郎にとっての政治のようにイデーであった。道遙の恋愛詩は、恋愛というイデーをうたう志の文学であり、小太郎の政治詩は、政治というイデーをうたう志の文学であった。漢詩漢文という滅亡寸前のジャンルにおいて、ともにイデーをうたう文学の志士が踵を接して現われ、前者は封建儒教の終焉を、後者は近代恋愛の開幕を　ともに予告しつつ、いずれも二十七歳で夭折したことは一奇とすべきであろう。

本稿は、一九七六年九月二十四日にいちおう書きあげていたが、さらに増補して現在の形とした。読みなおして見ると　表記などの不統一が甚だしい。これは他日修正したい。明らかな誤記は後付の正誤表で訂正するが見おとしがあろうと恐れる。内容の誤りとともに読者諸賢の教正を希望する。

奥平家の墓所宗堅寺の住職末野昌龍師に、広胖、知素　広淵につき過去帳の點検を依頼したところ一九七六年十月十日　手紙で示教された。それによると、奥平家はもと円通寺（亀岡寺紺屋町）の檀家だったが後世の城主の計らいで墓所を宗堅寺に移した。宗堅寺は台風時の火事で資料を焼失し、円通寺の過去帳は写ししか残っていない。そこでは広胖没年の天保八年には記事がなくしたがって月日も不明。知素については戒名と没日三月五日は記すが行年を明らかにせず、広淵

については全く記入がなく不明、ということである。

同年十月二日　奥平英郎氏の書簡に接し、その後両度の電話で示教されたことを要約すると次の通り。

知素┬穆（小太郎）
　　└知善┬敬一×はな┬女（夭逝）
　　　　　　　　　　└三代子×山森健治┬英郎
　　　　　　　　　　　　　　女（夭逝）

知善は亀山藩主松平信正の親族で信正の命により小太郎の死後　知素の嗣となり廃藩置県の後　京都市六角に移住。敬一は日露戦争に際し広島陸軍病院で戦病死。

英郎は大正十一年二月六日に生れ、少年時代、二階の押入に本箱と大書した古書入れがあり虫の食った糸とじの古書が沢山あったが近所に大火があって以後見かけなくなった。宗堅寺の現在の奥平家の墓は、同寺の墓地整理の直前、疎濶であった同寺を偶然訪問した英郎が住職末野師に依頼し、処々に点在したものを一ヵ所に集めたもので、その排列は師の配慮による。

なお、英郎氏は岸和田市磯の上三〇五ふじハウス8号に居住し、日本吃音・小心者協会常務理事である。

本冊の作製にあたって、奥平英郎、栗山（亀岡市役所広報課）、末野昌龍、同毋堂、高尾シズエ、原田亞土の諸氏の労を煩わした。ともに深く感謝する。

一九七七年三月十三日二二・〇〇

正誤表

頁	行	正	誤
3	5	意味で	意味を
6	1	嵐か	荒らかが
9	13	系譜	系略
16	10	愛多し	愛多い
18	5	綱領事	総領
29	13	明治	明
33	13	おれぬ〉	おれぬ」
43	14	おかげで	おかげて
54	2	曰く、	曰く「
65	10	『論語』	『語語』
74	12	犯して	犯して
78	8	渡るに由なし	渡るに由なし
82	末	秋き	秋
84	5	故園	故園
88	8	ことのひとつ	ことにひとつ
93	末	出処進退	出処進
94	2	激動させられた	激動されられた
〃	3	〃	〃
97	6	殉じ	殉し
99	15	いまだ	いまた

53頁　東魚西鳥補注　『淮南子』兵略訓に「池魚を畜ふる者は必ず猟獺を去り、禽獣を養ふ者は必ず狡狼を去る」という。小太郎がこれを含意したとすれば　初二句は、身を束縛されて自由でない飼われている魚鳥のような東西の人民たちが　自由をもとめて跳ね、あるいは傷つけあっているのに、上に立つ者はかれらをねらうカワウソやオオカミのような連中を追っ払おうともせず、こうしておこった日本国中の戦乱は　…ということになろうか。